

う)の交わり

水中に火を求む

いくら求めても絶対に得ることのできない、ないものねだりをするたとえ。

【類】木に縁(よ)りて魚を求む

酸いも甘いも噛み分ける

人生経験が豊かで分別があり、人情の機微や世の中の裏も表も知り尽くしているということ。

【説】酸っぱい物と甘い物を区別して味わい、そのいい点も悪い点もよくわかっていることから。

据え膳食わぬは男の恥

女性のほうから誘っているのに、それに応じないのは男の恥だということ。

【説】「据え膳」は目の前に置かれた食膳のこと。俗に女性のほうから男に言い寄ること。

末の露、本の雫

多少早い遅いの違いはあるものの、ともに遠からず消えてしまうものをいう。人の命ははかないことのとえ。

【説】葉末にある露も、根元の雫もやがて消えてしまふの意から。

好きこそ物の上手なれ

好きなことは熱中し、進んで工夫や努力をするから上達するのが早く、おのずと技術も向上するということ。

過ぎたるは猶及ばざるが如し

度を過ぎし行きすぎたことは、控えめすぎるのと同じようなものでよくない。物事はすべからく中庸が大切だということ。

【出】論語 【類】葉も過ぎれば毒となる

雀 すずめひやく 百まで踊り忘れず おど わす

若い頃に身についた習慣は、年をとってもなかなか直らないというたとえ。

【説】雀は死ぬまで踊るように飛び跳ねるしぐさ続けることから。

捨てる神あれば拾う神あり す かみ ひろ かみ

世の中には、人から見捨てられてしまうこともあれば、一方で助けてくれる人もいる。だから、たとえ不運なことがあっても、くよくよするなということ。

【説】「捨てる神あれば助ける神あり」とも言う。

脛に傷持つ すね きずも

人には隠しているが、過去に悪事を働いたことで、うしろめたいところがあるというたとえ。

【説】他人の目につかない向こう脛に傷があるの意から。

すまじきものは宮仕え みやつか

人に仕え、人に使われることは気苦労が絶えないもの。できればしないにこしたことはないということ。

【説】「宮仕え」は宮中や貴人の邸宅に仕えること。

住めば都 す みやこ

どんなに不便なところでも、そこに住んでしまえば愛着が出てきて、都のように住みよくなるということ。

【類】地獄も住処（すみか）

駿河の富士と一里塚 すまが ふじ いちりづか

まったくかけ離れていて比較にならないことのたとえ。

【説】「一里塚」は街道の一里（約四キロ）ごとに設置した土を盛った目印で、富士山と街道の一里塚とではまったくかけ離れていて比較にならないということ。

【類】月と蠶（すっぽん）／提灯（ちようちん）に釣り鐘

寸すんを曲まげて尺じやくを伸のぶ

小さいことは犠牲にして、大きな利益をつかむこと。

【説】一寸（約三センチ）の小さなものをさらに短く曲げ縮め、一尺（約三十センチ）の大きなものをいっそう長く伸ばすの意から。

せ

正せい鵠くを射いる

矢が的の中心をついている。要点・核心・急所をついていることのとえ。

【説】「正鵠」は急所・要点の意で、「せいこう」とも読み、「正鵠を得る」とも言う。

精神せいしん一到いつとう、何事なにことが成ならざらん

精神をその一点に集中して行えば、どんなにむずかしく思えることでもできないことはないという教え。

【説】「一到」は一つのこと集中する意。

【出】朱子語類【類】思つ念力岩をも徹（とお）す

清せい濁だく、併あわせ吞のむ

善人も悪人も、善悪の分け隔てもなく、来るものすべてがあるがままに受け入れる、広く度量の大きいことのとえ。

【説】大海は清流も濁流も区別することなく一緒に受け入れるの意。清流を善人に、濁流を悪人にたとえて言う。

青天せいてんの霹へき靨れき

思いがけなく起こる突然の大事件や出来事のこと。また、突然受ける思いもよらない衝撃のとえ。

【説】「青天」は青空、「霹靂」は雷鳴の意。

【出】陸游（りくゆう） 【類】寝耳に水／藪（やぶ）から棒

せいるい とも くだ

声涙、俱に下る

涙とともに語る、涙ながらに語る様子。

【説】感情が激して、声と涙が一緒になって流れ下るの意から。

【出】晋書（しんじよ）

せきあたた

席暖まるに暇あらず

いとま

非常に忙しいことのたとえ。

【説】ひとところに腰を下ろして、その席が暖まる時間すらないの意から。

【出】韓愈（かんゆ）

せきひんあら

赤貧洗うが如し

ごと

ひどく貧乏で、洗い清めたように何一つ持っていないという様子。

【説】「赤」はむなし、まったくないの意。すべてを洗い

流してしまったかのように何も無いほどの貧乏の意から。

せけんし たかまくら

世間知らずの高枕

厳しい世の中の動きも知らずにのんびり、平然と暮らしていること。世間とかかわりなくのんびり暮らす人のことを皮肉って言う言葉。

ぜに とき おに つか

銭ある時は鬼をも使う

金銭の蓄えさえあれば、どんな人でも自分の思いのままに使えるということ。金銭の持つ力の大きいことを言ったもの。

【説】銭があればたとえ恐ろしい鬼でも、それを使って仕事をさせることができるの意から。

【類】地獄の沙汰も金次第／金さえあれば飛ぶ鳥も落ちる

せ けい へい かわ

背に腹は代えられぬ

大事なことのためには、他の小事が犠牲になるのもやむを得ないというたとえ。

【説】体の中でもっとも大切な腹を背中と交換することはできない。腹を守るためには背中が犠牲になってもやむを得ないの意から。

瀬を踏んで淵を知る

用心深く初めに試してみても、どんな危険があるかを知らずとえ。

【説】まず浅瀬を渡ってみて、川の深いところがどこにあるかをさぐり知ることから。

千軒あれば共過ぎ

家が千軒もあるところならば、その中で互いに売買や雇用の関係が結べて、住む人たちがともに生計を立てていけるといふこと。

【説】「共過ぎ」は多数の者が互いに需要と供給の関係を補いながら生活していくこと。

千石取れば万石羨む

人の欲望は次から次へと大きくなり、際限がないというたとえ。

【説】一千石の俸禄（ほうろく）をもらえるようになると、一万石をとる者をうらやむようになるの意から。

【類】 隴（ろう）を得て蜀（しよく）を望む
ぜんしゃ くつがえ こうしゃ いまし

前車の覆るは後車の戒め

昔の人の失敗は今の人の戒めとなること。

【説】前を進む車がひっくり返るのを見て、後に行く車が戒めとする意から。

【出】 漢書

千畳敷に寝ても畳一枚

一人の間が必要とするものには限度がある。いたずらに多くの欲をかくべきでないという戒め。

【説】千畳もの広さがある部屋に寝たところで、一人に必要なのはせいぜい畳一枚であるの意から。

【類】 起きて半畳寝て一畳

千丈の堤も蝮蟻の穴を以つて潰ゆ

ちよつとした油断や不注意から、大きな失敗や損害が生じるたとえ。

【説】「千丈」は非常に長いことのたとえ。「蝮蟻」は蝮(けら)と蟻(あり)。千丈もの大きな堤防でも、蝮や蟻があけるごく小さな穴が原因で崩れてしまうの意から。「千丈の堤も蟻の一穴」「蟻の穴から堤も崩れる」などとも言つ。

【出】韓非子(かんぴし)

梅檀は双葉より芳し

将来大成する人物は、幼い時から優れたところが見られるということのたとえ。

【説】「梅檀」は白檀(びやくだん)の異称。白檀という香木は芽生えた双葉の頃から、よい香りがするの意から。
【類】実(み)の生る木は花から知れる／蛇(じゃ)は寸にして人を呑(の)む

船頭多くして船山へ上る

指揮をとる人が何人もいるためにまとまりがつかず、事がうまく運ばなかったり、思いがけない方向に物事が進んでしまうことのたとえ。

【説】船頭が多くいて、銘々が指図すると、船が山へ上つてしまふの意から。

善は急げ

よいと思ったことは、すぐに実行に移せということ。

【類】思い立ったが吉日

膳部揃うて箸を取れ

物事はあせらずに準備がすっかり整ってから始めよということ。

【説】食事は料理がすべてお膳に出揃ってから箸を取りなさいの意から。「膳部」は膳にのせる料理のことで、「全部」とかけたもの。

せんもん とうら こうもん おおかみ 前門の虎、後門の狼

一つの災難を逃れても、ほっとする間もなくすぐにまた他の災難に見舞われるというたとえ。

【説】 前門で虎の進入を防いだと思つたのもつかの間、今度は後ろの門から狼が迫ってくるの意から。

【類】 虎口（ここう）を逃れて亀穴に入る／一難去つてまた一難

せんり みち いっほ 千里の道も一歩から

物事はすべて一足飛びにできるものではなく、どんなに大きなことでも、ごく手近なところから始まるということ。

【説】 千里もの遠い行程も、足を踏み出した一歩から始まるという意から。「千里の行も足下より始まる」とも言う。

【類】 遠きに行くは必ず近きよりす／高きに登るは低きよりす

そ

そうか いぬ 喪家の狗

やせ衰えて、元氣のない人のたとえ。また、「喪」を「失う」の意として、家のない犬、野良犬の意とする説もある。

【説】 「喪家」は喪中にある家。「狗」は犬。喪中にある家の人は、悲しみのあまり飼い犬に餌をやることも忘れてしまい、犬はやせ衰えているの意。弟子とはぐれて一人たたずんでいた孔子（こうし）を見てある人が「まるで喪家の犬のようだ」と言つたという故事から。

【出】 孔子家語

そうぎやう やす しゅせい かた 創業は易く、守成は難し

新しく事業を始めることに比べると、でき上がった事業を受け継いで守っていくことのほうが難しいと

いっこと。

【説】「創業」は新しく事業を始める、また、国の基礎を固めることを言う。「守成」はできたものを堅実に長く守っていくこと。中国・唐の太宗（たいそう）が「創業と守成のどちらが難しいと思うか」と問うた時に、魏徵（ぎちよう）が「守成」と答えたという故事から。

【出】唐書

糟糠の妻

貧乏な時から苦勞を共にして、長年連れ添ってきた妻。

【説】「糟糠」は糟（さけかす）と糠（ぬか）。粗末な食べ物物の意。

【出】後漢書

倉廩実ちて礼節を知る

人間は経済的なゆとりができ、生活が安定して初めて、礼儀や節度をわきまえるものだということ。

【説】「倉廩」は米ぐら。米ぐらがいっぱいになって初め

て、礼節を知ることができるの意から。

【出】管子 【類】衣食足りて礼節を知る

俎上の魚

運命が尽きて死を待つ以外にない状態。また、相手の思うままになるより、仕方のない状態にあることのたとえ。

【説】俎（まないた）の上へのせられて料理されるのを待つ魚の意から。「俎の鯉（こい）」「俎の魚」とも言う。

袖すり合うも他生の縁

見知らぬ人と道で袖をすり合わせるということも、それは前世からの深い因縁によるものであるということ。人と人の出会いは単なる偶然ではないので、どんな出会いでも大切にせよということ。

【説】「他生の縁」は前世からの因縁の意。「他生」は「多生」とも書く。また、「袖振り合うのも他生の縁」「袖触れ合うも他生の縁」などとも言つ。

【類】一樹(いちじゅ)の陰一河の流れも他生の縁

備えあれば憂いなし

ふだんからいざという時のために準備しておけば、万一の時にも心配することはないということ。

【出】書経

その手は桑名の焼き蛤

うまいことをいっても、その手は食わないということ。

【説】「食わない」と三重県の「桑名」をかけ、桑名の名産「焼き蛤」を続けたしゃれ。

蕎麦の花も一盛り

娘は誰でも年頃になると、それなりに華やぎ、女らしい魅力が出て美しく見えるということ。

【説】蕎麦の花は地味で目立たないが、時期が来れば精一杯に咲いて、それなりに美しく見えることから。

【類】薊(あざみ)の花も一盛り／鬼も十八番茶も出花

損して得取れ

一時的には損をすることになっても、その損によって将来大きな利益を得るほうがよいということ。

損して恥掻く

損をした上にさらに恥までかいて、散々な目に遭う。

た

対岸の火事

自分には危害が及ばず、なんの影響もないことのとたとえ。

【説】向こう岸の火事はこちらの岸には飛び火してくる危険がない。安全なところから高みの見物をするようなも

の。「対岸の火災」とも言う。

だいきち きまよう かえ

大吉は凶に還る

易の卦（け）から出た言葉。縁起のいい吉も、過ぎればかえって凶にかえるという意味。良いことばかりは、長く続かないということ。

だいく ほ た

大工の掘っ立て

他人のことに追われて、自分のことがおろそかになり、手が回らないことのたとえ。

【説】 人には立派な家を建てる大工でも、自分はそまつな家に住んでいることから。

【類】 紺屋（こじや）の白袴（しろばかま）／医者（いしや）の不養生

たいけん く

大賢は愚なるが如し

非常に賢い人は、ふだん、知識や知性を表に出さないのので、一見愚かな人のように見えるということ。

【類】 大巧（おほたく）は拙（せつ）なるが若（わか）し

たいこう せつ

大功は拙なるが若し

本当の名人は、見せかけの小細工などをしないから、ちよつと見たところでは下手に見えるということ。

【出】 老子

【類】 大賢（おほけん）は愚（ぐ）なるが如（ごと）し

だいくん まさむね き

大根を正宗で切る

小さなことをわざわざ大げさにすることのたとえ。また、才能のある人につまらない仕事をさせること。

【説】 「正宗」は、鎌倉時代の名刀。

【類】 鶏（けい）を割（わ）くに焉（いずく）んぞ牛刀（ぎゅうとう）を用（もち）いん

たいざんめいどう ねすみいっぴき

大山鳴動して鼠一匹

大げさに騒いだわりには、たいしたことのない結果に終わることのたとえ。

【説】 大きな山が音を鳴り響かせて動くので何事かと見ていたら、鼠（ねずみ）が一匹（いっぴき）出てきただけだったという意。「大山」

は「泰山」とも書く。

大事だいじの前のまえ小事しょうじ

大きなことをしようとする時には、小さなことにも気を配って慎重にしないと、油断から失敗を招くおそれがあるということ。また、大きな目的の前には小さな犠牲はやむを得ないということ。

大事だいじは小事しょうじより起おこる

ちよつとした不注意、小さな油断が、往々にして大きなことをひき起こす原因となるということ。

大だいの虫むしを生いかして小しょうの虫むしを殺ころす

全体を生かすためには一部分を犠牲にすることのたとえ。また重要なものとそうでないものでは、重要でないものを切り捨てること。

【説】「小の虫を殺して大の虫を助ける」とも言う。

大だいは小しょうを兼かねる

大きな物は小さな物の代わりとしても使えるが、小さな物は大きな物の代わりにはならない。小さい物より大きめの物のほうが役に立つということ。

大欲たいよくは無欲むよくに似にたり

大きな望みを抱いてる人は、目先の小さな利益にはこだわらないので、一見、無欲であるかのように見えるということ。また、あまりに欲深い者は失敗しやすいので、なんの利益も得られず、結局は欲のない者と同じ結果になるということのたとえ。

高たかきに登のぼるには低ひかきよりす

高いところに登るには、まず低い所から登り始めるのと同じように、物事を行う時には、順序を追って手近なところから確実に行うべきだということ。

【出】中庸

【類】遠きに行くは必ず近きよりす／千里の道も一歩から

鷹は飢えても穂を摘まず

節操のある人は、たとえどんなに困窮しても不正な
ことや道義に外れることを決してしないということ
のたとえ。

【説】鷹はどんなに飢えて死にそうになっても、稲穂をつ
いばんだりしないことから。

【類】渴しても盗泉の水を飲まず

高みの見物

高い場所から騒ぎを見物するように、利害のない立
場からなりゆきを興味本位に傍観すること。

【説】「高み」は高い場所。

多芸は無芸

多くの学問や芸に通じていると、どれかひとつ、専
門といえるものを極めることができないうので、結局、

芸がないのと同じだということ。

竹屋の火事

腹を立てて、言いたい放題にぼんぼんものを言うこ
と。

【説】竹屋が火事になると、竹がはじけてぼんぼんにぎ
やかな音をたてることから。

他山の石

他人のよくない言動、間違いなどのたとえ。それを
戒めとして、自己の修養のために役立てること。

【説】よその山から出る粗末な石でも、宝石を磨くのに役
立つことから。

多勢は無勢

多人数に少人数で対抗しても、とても勝ち目はない

ということ。

【類】衆寡（しゆうか）敵せず

叩けば埃が出る

見た目に現れていなくても、こまかく調べれば、やましいところや、弱点のひとつやふたつは見つかるものだということ。

畳の上の水練

理屈や方法をよく知っているのに経験がないため、実際の役に立たないことのとたとえ。

【説】畳の上で水泳の練習をすること。「畳水練」とも言う。
【類】机上の空論

田作りも魚のうち

ごまめのような小魚でも魚に変わりはないように、弱く無力な者でも数の上では仲間に入るといふことのとたとえ。

た

【説】昔ごまめを、たんぼの肥料に使ったら、米がたくさんとれたところから、田作りと呼ばれるようになり、縁起の良い正月料理のひとつに数えられるようになった。

【類】蝙蝠（こうもり）も鳥のうち

立っている者は親でも使え

急ぎの時には、たとえ親でもかまわず、近くの人に用事を頼むのが早いということ。自分が座っていて、立っている人にものを頼む時の言い訳に用いる言葉。

尊い寺は門から知れる

人徳のある人、価値のあるものは、外見だけで、それがわかるということ。

【説】門構えからして立派なお寺は、それだけで訪れる者がありがたみを感じさせることから。

脱兎の如し

逃げるウサギのように、行動がきわめてすばやいこと。

【類】脱兎の勢い

立つ鳥、跡(後)を濁さず

人も立ち去る時は、見苦しくないように後始末をきちんとすべきだということ。また、引き際がきれいなことのたとえ。

【説】水鳥が飛び去った後の水辺は、濁ることなくいつもきれいに澄んでいることから。「飛ぶ鳥跡を濁さず」とも言う。

立て板に水

立てかけた板に水を流すように、弁舌がよどみないこと。

蓼食う虫も好き好き

辛い蓼の葉を好んで食べる虫がいるように、人の好みもさまざまだということのたとえ。物好きなこと、のたとえにも使われる。

伊達の薄着

着ぶくれをいやがり、寒くてもやせがまんして薄着でいること。

立てば芍薬、座れば牡丹、

歩く姿は百合の花

美しい女性の容姿、立ち居ふるまいを艶やかな花にたとえた言葉。

棚から牡丹餅

思いがけない幸運が転がり込んでくることのたとえ。【説】略して「棚ぼた」、「開いた口へ牡丹餅」とも言う。

掌を反す

てのひらを返すように、いとも簡単にできること。また、人の心や態度が急に変わったりすることのたとえ。

とえ。「手のひらを返す」とも言う。

他人の疝氣を頭痛に病む

自分にはまったく関係のないことで、余計な心配をするたとえ。

【説】「疝氣」は腹痛や腰痛のこと。人の病気を自分の頭痛の種にすることから。「人の疝氣を頭痛に病む」とも言う。

他人は時の花

花も季節が過ぎれば散ってしまうように、他人の好意も長続きするものではないので、あまり頼りにしてはいけないという教え。

【説】「時の花」は季節に咲く花。

旅の恥は掻き捨て

旅先では、まわりに知っている人もいないし、そこをすぐに去ってしまうので、いつもならしないような恥ずかしい行為も平気でやってしまうということ。

旅は道連れ、世は情け

旅をするには同行者がいたほうが心強いし、なにかと助け合えて好都合なもの。世の中も同様に、お互い思いやりを持って助け合っていくことが大切だということ。

卵に目鼻

白い卵に目と鼻をつけたような、色白でかわいらしい顔だちのたとえ。

卵を見て時夜を求む

あまりにせっかちで早計すぎることのたとえ。

【説】「時夜」は鶏が夜明けに鳴いて時を告げること。まだ卵なのにそれが成長して時を知らせるのを待ち望むことから。

【出】莊子

たまに出る子は風に遭う

ふだんしないようなことをたまにすると失敗したり、ひどい目にあつたりすることのたとえ。

矯めるなら若木のうち

人の悪い習慣や欠点などを直すには、柔軟な若いうちからしつけたほうがよいということ。

【説】 樹木の曲がっている枝ぶりを整える（矯める）なら、やわらかい若木のうちに手を加えたほうがよいという意。

【類】 鉄は熱いうちに打て

便りのないのはよい便り

なんの消息もないのは、便りを書くほどの問題もなく、無事である証拠。よい便りと変わりないということ。

足るを知る者は富む

欲がなく、分相応に満足できることを知っている者は、心が豊かであるということ。

【出】 老子

断機の戒め

学問など、物事は途中でやめてしまつては、なんにもならなくなつてしまつてしまうという教え。

【説】 孟子が学業の途中で家に帰つて来たとき、母親が織りかけていた機の糸を断ち切つて、学問を途中でやめるのはこの織物の糸を断つようなものだと言つて戒めたことから。

【出】 古列女伝

短気は損気

短気を起こしてもなにも良いことはない、結局は自分が損をするはめになるといふ戒め。

断金の交わり

厚い友情で結ばれた親しい交わりのこと。

【説】 堅い友情の力で、金さえも断ち切ることができるという意。「断金の契り」とも言う。

【出】 易経【類】 金蘭の交わり／刎頸(ぶんけい)の交わり

断じて行えば鬼神も之を避く

強い決断のもと、物事に立ち向かえば、なにもそれをさまたげるものはないということ。

【説】 強い決意で決行すれば、恐ろしい鬼神さえその道をゆずるという意。

【出】 史記

男子の一言、金鉄の如し

男がいったん口にした言葉は、金や鉄のように堅く確かなものであり、必ず実行しなければならぬということ。

【類】 武士に二言はない

だんだんよくなる法華の太鼓

物事が徐々によい方向に向かっていくさまをしゃれて言った言葉。

【説】 「法華」は日蓮宗のこと。その信徒が打つ団扇(うちわ) 太鼓の音がしだいに大きくなって響く「鳴る」と、物事の「成る」をかけたもの。

断腸の思い

きわめてつらい思い、深い悲しみのたとえ。

【説】 「断腸」は腸が断ち切れんばかりの悲しみ。猿の子を捕らえて舟に乗せたところ、母猿が百里以上も追いかけてきて、ついには舟に飛び込んで息絶えた。その母猿の腹を裂いてみると、腸がずたずたに断ち切れていたという中国の故事から。

【出】 世説新語

小さく生んで大きく育てる

子供は小さい赤ん坊を楽に産んで、大きく育てるのがよいということ。事業なども小さな資本から、だんだん大きくしていくのが、よいやり方だということ。

知恵は小出しにせよ

持っている知恵を一度に出しきってしまうと肝心な時によい考えがうかばない。いざという時のために、少しずつ知恵を出してゆくの賢明なやり方だということ。

知恵は万代の宝

すぐれた知恵というものは、その人ひとり、一代の宝ではなく、後々の時代まで役に立つ宝であるとい

うこと。

近くて見えぬは睫

自分のことや身近なことは、案外気づかないということのたとえ。

近道は遠道

近道は、意外に危険だったり道が悪かったりして時間がかかり、遠回りとあまり変わらないもの。物事も、あせらず、安全で確実な道を選ぶほうがよいというたとえ。

竹馬の友

幼い頃、竹馬に乗って一緒に遊んだような友達。おさななじみのこと。

知者は惑わず勇者は懼れず

知恵のあるものは、物事を何でもよく知っているの

で、判断に迷うことがなく、勇気ある者は、何事にも自信を持って行動し、恐いものがないということ。

【出】 論語

知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ

知恵のある者は、その知がよどみなく流れる水に似ているので、水を好み、楽しむ。また、仁徳を備えた者は、心静かで物事に動じない大きな山に似ているので、山を好み、楽しむということ。

【出】 論語

治に居て乱を忘れず

平和な時でも、世の中が乱れていた時のことを忘れてはいけないという意味。物事が順調な時でも、万一の場合を考えて、その用意を怠ってはいけないということのたとえ。

【出】 易経

血は水よりも濃い

血のつながりがあるものは、他人よりも結びつきが強く頼りになるということ。また、人の性格、特性は遺伝によるところが大きいといった意味にも使われる。

【対】 兄弟は他人の始まり

茶腹も一時

お茶を飲めば、一時、空腹はしのげる。わずかなものでも、一時のぎにはなることのたとえ。

忠言耳に逆らう

役に立つ忠告ほど、耳に痛いものだということ。

【出】 孔子家語

【類】 良薬は口に苦し

忠臣は二君に仕えず

忠義を重んじる臣下は、生涯ひとりの主君にしか仕えないということ。

【出】 史記

【類】 貞女は二夫に見（まみ）えす

長者の万灯より貧者の一灯

ちやうじや

まんとう

ひんじや

いちとう

お金持ちが一万もの灯明をとすよりも、貧しいものが心を込めてとす一灯のほうが価値があるという意味。見えを張った多くのものより、たとえわずかでも真心のこもったもののほうが尊いということ。

【説】 お釈迦様が阿闍世王（あじゃせおう）に招待された時の帰り道で、王のともした万の灯明はその多くが消えてしまったが、貧しい老女が工面して捧げた一灯は消えずに、一晚中明るく輝き続けたという故事から。

【出】 阿闍世王受決経

長所は短所

ちやうじや

たんじや

長所をあてにしていると、思わぬ失敗をしたりする

もの。長所も考えようでは、短所にもなるということ。

提灯に釣り鐘

ちやうちん

つ

がね

まったく釣り合わないことや比べものにならないもののたとえ。

【説】 提灯と釣り鐘は同じような形をしているが、大きさと重さがまったく違つことから。

【類】 月と蠟（すっぽん）

提灯持ち川へはまる

ちやうちんも

かわ

人を先導したり、人の手先になって動くこととするものが、先に失敗してしまうことのたとえ。

【説】 人の足元を照らす提灯持ちは、自分の足元がよく見えていないため、先に川に落ちてしまうという意。

頂門の針

ちやうもん

いっしん

人の痛いところを突く、厳しい忠告のたとえ。

【説】 「頂門」は頭の頂（いただき）。針を頭のとっぺんに

突き刺すという意味から。

塵も積もれば山となる^{ちり つ やま}

塵のようにわずかなものでも、たくさん積み重ねると、山のように大きなものになるということ。

【説】どんなに小さなものでもおろそかにしてはいけないということ。儉約、蓄財のたとえとしても使う。

つ

追従も世渡り^{ついでしやう よわた}

世渡りのためには、人にこびたり、へつらうことも一つの手段であるということ。

杖に縋るとも人に縋るな^{つえ すが ひと すが}

むやみに人をあてにしたり、人を頼ったりしてはいけないという戒め。

使う者は使われる^{つか もの つか}

人を使う立場になれば、いろいろと気を遣ったりすることが多くなり、苦勞が耐えない。結局、人に使われているようなものだということの意味。

使っている鍬は光る^{つか くわ ひか}

たえず使っている鍬は、さびたり汚れたりする間もないのでいつも光っている。人もたゆまぬ努力をしていけば、美しく輝いて見えるということのたとえ。

【類】転がる石には苔（こけ）が生えぬ

月と鼈^{つき すっぽん}

形が似ていても、比較できないほど大きな差があるたとえ。

【説】月と鼈は形は丸いが、まったく違うものだという意。

【類】提灯(ちようちん)に釣り鐘

つきよ むらぐも はな かせ
月に叢雲、花に風

よいことというものは、えてして邪魔が入りやすく、思いどおりにならないというたとえ。

【説】名月を、と見上げれば雲がかかり、桜の花を、と思えば風が吹き、思つにまかせない様子のこと。

【類】花に嵐／好事魔多し

つきひ せきもり
月日に関守なし

月日の流れは早く、それをさえぎることなど誰にもできないということのたとえ。

【説】「関守」は関所の番人。

つきよ かま め
月夜に釜を抜かれる

うかつ、不注意、油断もはなはだしいことのたとえ。

【説】明るい月夜に、大事な釜を盗まれてしまう(抜かれる)という意。

つきよ ちようちん
月夜に提灯

明るい月夜にわざわざ提灯をともしよように、不必要でむだ、かえつて邪魔なこと。

【説】「月夜に提灯夏火鉢」と続けても使つ。

つちいっしょう かねいっしょう
土一升到金一升

土一升の価値が金一升到相当するという意味。土地の値段が非常に高いことのたとえ。

つなわた よわた
綱渡りより世渡り

綱渡りよりも、世渡りのほうがもっと大変でむずかしいということのたとえ。

つの た うし ころ
角を矯めて牛を殺す

ささいな欠点を強引に直そうとして、全体をだめにしてしまうこと。

【説】「矯める」は矯正、直すこと。曲がっている牛の角

をまつすぐに直そうとして、牛を殺してしまふことから。

躓く石も縁の端

何気ないもの、ちょっととした付き合ひでも、何がしかの因縁で結ばれているということ。

【説】ふとつまずいた石も、縁あつて多くの石の中から、その石につまずいたという意。

【類】袖(そで)すり合つても他生の縁／一樹の陰一河の流れも他生の縁

妻の言つに向つ山も動く

ふだんあまり人の意見を聞かない人でも、妻の言うことには耳を貸す、従つてしまふことのとたとえ。

【説】妻の言つことには、動くはずのない向つ山の山さへも、動くという意。

罪を憎んで人を憎まず

憎むべきことは犯した罪であり、罪を犯すに至つた

人間を憎しみの対象としてはいけないということ。

【出】孔叢子(くそうじ)

爪で拾つて箕でこぼす

苦勞して少しずつためたものをいっぺんに使い果たしてしまふことのとたとえ。

【説】「箕」は穀物のごみや殻などをふるいにかける竹で編んだ道具。爪の先で拾ひ集め、やっとの思いでためたものを、箕で一氣にどつとこぼしてしまふの意から。「枘(ます)で量つて箕でこぼす」とも言ひ。

爪に火を点す

非常に貧しい生活をする事。またひどくけちなことや、儉約することのとたとえ。

【説】あまりに貧しくて、ろうそくの代わりに自分の爪に灯をともすという意。

爪の垢を煎じて飲む

立派な人、優れた人に少しでもあやかろうとするこ
とのたとえ。

【説】爪の垢のようなものでも、立派な人のものを煎じて
飲めば、少しはその人にあやかれるだろうという意。

鶴の一声 つる ひびきえ

大勢が議論してまとまりがつかない時に、それを押
さえてすべてを決定する、権威や実力のある人の一言。

【説】「雀の千声、鶴の一声」とも言う。

鶴は千年、亀は万年 つる せんねん かめ まんねん

鶴は千年、亀は万年生きるということから、長寿で
めでたいこと。



亭主の好きな赤烏帽子 ていしゅ あかえぼし

一家の主人の好むものは、家族もそれに従わなけれ
ばならないことのたとえ。

【説】烏帽子は普通黒色だが、亭主が赤い烏帽子が好きだ
と言えば、それに同調せざるを得ないという意。

手が空けば口が開く て あ くち あ

仕事のない苦しい暮らし向きのこと。また、仕事が
暇になったとき、とかくおしゃべりに興ずる様子の
こともいう。

【説】仕事がなく手が空けば、ひもじくなって口が開くと
いう意。

手書きあれども文書きなし てか ふみか

字のきれいな人は多いけれど、文章のうまい人は少
ないということ。

敵てきに塩しおを送おくる

敵対する相手が困っている時、救いの手を差し伸べる。お互い対等に戦うために、相手の窮状を救うことのため。

【説】戦国時代、甲斐（かい）の武田信玄のもとに塩が入らなくなり、困っているのを知った越後の上杉謙信が、敵対する相手にもかかわらず、塩を送って助けたという有名な逸話から。

敵てきは本能寺ほんのうじにあり

真の目的が別のところにあることのため。

【説】明智光秀（あけちみつひで）が、備中（びっちゅう）の毛利（もうり）を攻めに行くと呼び出して陣し、途中で進路を変え、京都の本能寺で織田信長（おだのぶなが）を襲ったことから。

敵てきもさるもの引ひつ掻かくもの

敵対する相手もなかなかの実力で、あなどれないということ。

【説】「さるもの」は然（さ）る者、さすがな者の意。これを「猿（さる）」にかけ、引つ掻くと続けたもの。

鉄てつは熱あついうちに打うて

人は、純粹で柔軟な若いうちに、頭も身体も鍛えておくべきだということ。また、何事も熱い情熱が冷めないうちに実行したほうがよいということのため。

【説】鉄は真つ赤に焼けている間なら自由な形にしやすい、鍛えられるが、時間がたつて冷えてしまうと簡単に形が変えられないことから。

出物でもの腫れ物もの、所嫌ところきらわず

おならやおできは、時と場所を選ばず、都合の悪い場合でも出てしまうということ。

出る杭は打たれる

才能があり、それが際立って目立つ人は、とかく人から妬まれたり、憎まれたりするものだということ。また、出すぎた行為をして、まわりから非難されることのたとえ。

【説】同じ高さで並んだ杭の中で、一本高いのがあれば、叩(たた)いて高さを揃えられることから。

【類】高木は風に折らる

出る船の纜を引く

あきらめきれずにいつまでもこだわったり、未練がましくすることのたとえ。

【説】「纜」は船を岸につなぐ綱。出て行く船の纜をわざわざ引く張るという意。

伝家の宝刀

先祖代々伝わる家宝の名刀のこと。いざという時、

重要な時にだけ使う、最終的な手段や方法。奥の手。切り札。

天災は忘れた頃にやってくる

自然災害は、以前の災害を忘れかけた頃、人々がその警戒心をなくした頃にふたたび襲ってくるという戒め。ふだんからの心がけが大切だということ。

【説】「災害は忘れた頃にやってくる」とも言う。物理学者・随筆家の寺田寅彦の言葉から。

天知る地知る我知る子知る

悪事などをどんなに隠そうとしても、少なくとも天と地と私とあなたは知っている。いずれは世間の人たちに必ず発覚するという戒め。

【説】「四知(しち)とも言う」。

椽大の筆

堂々としていて重厚な文章のこと。

【説】「椽(てん)」は、家の屋根を支えるたる木のこと。たる木のように太く大きな筆の意。

【出】晋書(しんじょ)

てんたか うまこ あき

天高く馬肥ゆる秋

さわやかで豊かな秋の季節をたたえる言葉。

【説】秋空が高く澄みきっていて、馬もよく草を食べ、肥える季節という意。

てんとうさま みとお

天道様はお見通し

誰が見ていなくても、お天道様が、いつでもすべてを見抜いている。嘘や悪事は隠し通せるものではないということ。

てん しばき

天に唾す

人に危害を与えようとして、逆に自分がその害を受けること。

【説】天に向かって唾(つば)を吐けば、その唾が自分の

顔に落ちてくることから。「天を仰いで唾す」とも言う。

てん にぶつ あた

天、二物を与えず

天はひとりの人間に、人より優れたものをいくつも授けることはない。優れた才能を持つ人にも欠点はあるものだという事。「天は二物を与えず」とも言う。

てん みずか たす もの たす

天は自ら助くる者を助く

天は、人に頼らず自分の力で努力する者を助け、幸福へ導くという意味。

てんもうかいかいそ

天網恢々疎にして洩らさず

天の意志は常に公平で、悪事を犯した者は決して逃れることはできないということ。

【説】「恢々」は広大、「疎」は粗い。天の網は広く大きく

て、網の目が粗いように見えるが、何一つ洩らすことはないという意。

【出】老子

天を怨みず人を咎めず

自分の置かれた境遇がどんなに不遇でも、決して天を恨んだり、人のせいにしたりはしていない。それも天の意志と受け止め、自らの足りないところを反省し、ひたすら修養に努めよということ。

【説】「咎めず」は「尤めず」とも書く。

【出】論語

と

問屋の只今

返事だけ調子がよくて、なかなか行動が伴わないことのとたとえ。

【説】「問屋（といや）」は「とんや」のこと。問屋の口癖

でなんでも「ただいま」と返事をするが、なかなかすぐに物が届かないことから。

【類】紺屋（こじや）の明後日（あさって）

灯火、親しむべし

さわやかな秋の夜長は、明かりに親しみ、本を読むのに最適だということ。

【出】韓愈

堂が歪んで経が読めぬ

いろいろな口実をつけ、自分の誤りや失敗をごまかすことのとたとえ。また、理屈ばかりで実行が伴わないこと。

【説】怠け者の僧が、うまく経が読めないのは、お堂が歪んでいからだと、筋違いな言い訳をしたことから。

同舟、相救う

同じ舟に乗っていれば、舟が沈みそうな時には見ず

知らずの他人であっても力を合わせて助け合う。仲が悪かったり、見知らぬ者同士でも、いざという時、利害が一致すれば互いに助け合うということ。

灯台、下暗し

身近すぎるため、気づかないことやわかりにくいことがあるというたとえ。

【説】「灯台」は室内用の燭台（しよくだい）のこと。まわりは明るい、燭台の真下は陰になって暗いことから。

【類】近くて見えぬは瞳（まつげ）

問うに落ちず語るに落ちる

人から問いかけられる時には、用心して隠していることを漏らさないよう注意するが、自分から話している時には、ついうっかり口をすべらせて本当のことを話してしまうということ。

【説】「落ちる」は白状するという意。

堂に升りて室に入らず

学問や芸がある程度の水準には達しているが、まだ奥義をきわめるまでには至っていないということ。

【説】「堂」は表座敷、客間、「室」は奥の間。表座敷に上がった程度で、奥の間はまだ先にあるという意。

【出】 論語

同病、相憐れむ

同じ悩みを持つ者や恵まれない境遇にいる者同士は、互いの気心も知れるので、同情し合うということ。

【説】同じ病に苦しむもの同士は、その辛さもわかるので、互いになくさめ合うという意。

【出】 吳越春秋

豆腐に銚

なんの効果も反応もないこと。まるで手応えのないことのとえ。

【説】「銚」は材木をつなぎ止めるための「コ」の字形の釘（くぎ）。

【類】糠（ぬか）に釘／暖簾（のれん）に腕押し

どつりひやつべん ぎりいつべん

道理百遍、義理一遍

筋の通った道理を百回聞かせるよりも、たった一度、義理を尽くした理屈抜き行為を見せることのほうが、人の心を動かすということ。

Junjun おの

螻螂の斧

弱い者が自分の力も顧みず、強敵に立ち向かうこと。身のほど知らずに強がることのたとえ。

【説】「螻螂」はカマキリのこと。カマキリがどんな大きなものにも、前足を上げて威嚇することから。

【類】ごまめの歯ぎしり

とお しんせき ちか たにん

遠い親戚より近くの他人

遠くに住んでいる親戚より、近くに住んでいる他人

のほうが、いざという時に頼りになるということ。

【類】遠水近火を救わす

とお ちか だんじょ なか

遠くて近きは男女の仲

離れていて、縁遠いかのように見えても、男女の仲というものは、意外に結ばれやすいものだということのたとえ。

とお しんどう じゅうご さいし

十で神童、十五で才子、

はたち す ただ ひと

二十過ぎれば只の人

子供の頃は、神童と呼ばれるほど優れた才能を持っていた人間も、成長するにつれてだんだんと平凡な普通の人になってしまう場合が多いということ。

とき えがた うしな やす

時は得難くして失い易し

よい機会というものにはなかなかめぐりあえないし、めぐってきたとしても、あっという間に逃げてしま

う。また、過ぎ去った時間も同じように取り戻せない
ので、日々、心して大切に過ごすべきという教え。

【出】史記

時は金なり

時間はお金と同様に貴重なもの。無駄に使ってはい
けないということ。

読書百遍、義、自ずから見

どんなに難解な本でも、繰り返し何度か読めば、お
のずと意味がわかってくるということ。

【説】「読書百編意自ずから通ず」とも言う。

【出】魏志(ぎし)

毒を食らわば皿まで

いったん悪い事に手を染めたならば、もう、後戻り
はできないので、とことん最後までやりとおすこと
のたとえ。

【説】毒を食べてしまい、どうせ助かる見込みがないのな
ら、毒のついた皿まできれいになめてしまおうという意。

得を取るより名を取れ

金銭や物質的な満足よりも、名誉を重んじるべきだ
ということ。

【対】名を取るより得を取れ

毒を以て毒を制す

悪を制するために、同様の悪を用いてそれに対抗す
ること。

【類】暴(ぼう)を以て暴に易(か)う

所変われば品変わる

土地が変われば同じ物でも使い方や呼び方などが変
わる。人が同じように生活していても、地域によっ
て習慣、風俗も異なるものだということ。

【類】浪速(なにわ)の葦(あし)は伊勢の浜荻(はまおぎ)

年寄りの言(い)じやと

牛の鞆(うし)ははずれない

経験の豊富な年寄りの意見は、間違いや見当外れがないということのたとえ。

【説】「鞆」は馬や牛の尻にかけて鞍(くら)などをしっかり固定する紐(ひも)。

年寄りの冷(ひ)や水(みず)

老人が自分の年や体力を考えずに、無理な行い、ふるまいをすること。年輩者が元気にふるまったりするのを若い人が冷やかして言う言葉。

【説】年寄りが、体によくはない冷たい水を飲むことから。

隣(となり)の花(はな)は赤(あか)い

同じようなものでも人のものはよく見え、欲しくなかったり、うらやましく思ってしまうことのたとえ。

【説】同じ赤い花でも隣の家に咲いている花は自分の家の花よりも赤く見えてしまうという意。

怒(ど)髪(はつ)冠(かんむり)を衝(つ)く

髪の毛が逆立ち冠を突き上げるほどの怒り。激怒。またその形相。

【説】「怒髪天を衝く」とも言う。

【出】史記

鳶(とび)が鷹(たか)を生(う)む

平凡な親から優れた才能を持つ子供が生まれることのたとえ。

【説】「鳶が孔雀を生む」とも言う。

飛(と)ぶ鳥(とり)の献(こん)立(だて)

捕らえてもない飛ぶ鳥を見て料理の献立を考えるように、まだ不確かなものをあてにして、いろいろと計画を練ること。

【類】 捕らぬ狸（たぬき）の皮算用

と お 飛ぶ鳥を落とす

圧倒的な権力や勢力。勢い盛んなこと。

【説】 飛んでいる鳥でさえ、落としてしまう勢いの意から。

「飛ぶ鳥を落とす勢い」と用いられることが多い。

と たぬき かわざんよう 捕らぬ狸の皮算用

捕まえてもいない狸の皮の値段や儲けを計算するよ
うに、まだ手に入れていないものをあてにして計画
を立てること。

【説】 「算用」は金銭などの計算。

【類】 飛ぶ鳥の献立

と じい い か きつね 虎の威を藉る狐

それほどの実力も能力もない人が、権勢のある者の
力をかさに威張ったり、勝手なふるまいをすること
のたとえ。

【説】 虎に捕らえられた狐が「私は天帝に百獣の長になる

ように命ぜられた。うそだと思うなら私の後について来

なさい」と言うので、虎が狐についていくと、狐の後ろ

の虎を見て動物達が逃げ出したのに、虎はみんなが狐を

恐れて逃げたと思ひ込んだという逸話から。「藉る」は利

用すること。

【出】 戦国策

と じい えが いぬ るい 虎を描きて狗に類す

凡人が豪快で優れた人物の真似をして失敗し、かえ
って軽薄に思われてしまうことのたとえ。

【説】 「狗」は犬。立派な虎を描こうとして、犬のような
絵になってしまふこと。

【出】 後漢書

と じい へんむつ 鳥なき里の蝙蝠

強い者や優れた人のいない所で、つまらない者が大
きな顔をしていばっていることのたとえ。

【説】鳥のいない場所では、蝙蝠が我が物顔で鳥のように飛び回っていることから。

泥棒に追い銭

泥棒に物を盗(と)られた上に、お金まで渡してやること。損をした上にさらに損をすることのたとえ。

【説】「盗人に追い銭」とも言う。

泥棒を見て縄を絢う

泥棒を見つけてから捕まえるための縄を絢うように、ふだん何の準備もしていなくて、事が起きてから用意しても間に合わないということ。

【説】略して「泥縄」と言う。

団栗の背競べ

あまり差がなく、似たり寄ったり、優れた者も見当たらないこと。

【説】団栗をいろいろ比べてみても、どれも同じような形、

大きさでほとんど区別がつかないことから。

飛んで火に入る夏の虫

自ら進んで危険や災難に身を投ずる愚かな行為のたとえ。

【説】明かりに集まってくる夏の虫が燃え盛る火に飛び込んで焼け死んでしまうことから。

鳶に油揚げをさらわれる

大事なものを不意に横取りされることのたとえ。

【説】空を悠々と飛んでいる鳶がすばやく降りてきて、あつという間に油揚げを奪って飛び去って行く様子から。

「鳶」は「とび」とも読む。

ないが意見の総じまい

財産を使い果たしてしまえば、放蕩（ほうとう）も自然と止むということ。

【説】放蕩や遊興をやめるといくら忠告しても聞かない者でも、金を使い果たしてしまえば、いやおうなく道楽もできなくなる。財産がなくなること、意見する必要がなくなるの意。

ない袖は振れぬ

金や物、あるいは能力などがないために、してやりたくても、どうにもできないという状態のたとえ。

【説】いくら袖を振りたくても、ない袖を振るわけにはいかないの意から。

泣いて馬謖をきる

規則や秩序を守るために命令に背いた者は、私情にとらわれずに厳罰に処するということ。

【説】中国・蜀（しよく）の名將 諸葛孔明（しよかつこうめい）が、命令に違反した部下の馬謖を泣きながら斬ったという故事から。「涙を揮（ふる）って馬謖を斬る」と言つ。

【出】十八史略

ない時の辛抱、ある時の儉約

金がない時には不自由でも借金などをせずじつと我慢し、金がある時にはあるにまかせて浪費せず儉約を心がけよということ。

長い物には巻かれる

権力や勢力が強く、力の及ばない者には抵抗せず、おとなしく相手の言いなりになっておくほうが賢明だということ。

鳴かぬ蛭が身を焦がす

口に出して言うよりも何も言わない者のほうが、そ

の心中の思いは切実で強いものがあるということのたとえ。

【説】 鳴くことのできない蛍が、心中に思いを秘めて身を焦がすかのように光っていることから。「鳴く蟬（せみ）よりも鳴かぬ蛍が身を焦がす」とも言う。

流れに棹さす

周囲の成り行きや情勢に合わせて、物事をさらにうまく進めること。機に乗じてさらに力を加え、物事を調子よくはかどらせることのとたとえ。

【説】 流れに乗って棹を操り小舟を進める意から。

泣き面に蜂

よくないことが重なって起こることのとたとえ。

【説】 泣いてむくんでしまった顔を、蜂が刺してさらに泣かせ、腫れさせるという意から。

【類】 弱り目に祟（たた）り目／痛む上に塩を塗る

泣く子と地頭には勝てぬ

理屈のわからない者や権力者と争ってもむだであるということのとたとえ。

【説】 「地頭」は中世の荘園（しょうえん）を管理した権力のある役人。

泣く子は育つ

大きな声でよく泣く赤ん坊は元氣がある証拠だから、丈夫にたくましく育つということ。

【類】 赤子は泣き泣き育つ

なくて七癖、あって四十八癖

人は誰でも、多かれ少なかれ癖を持っているということ。

【説】 癖がなさそうに見える人でも七つぐらいは持つており、癖が多そうな人には四十八もあるの意から。

鳴く猫は鼠を捕らぬ

口数が多く自己宣伝ばかりする者に限って、とかく口先だけで実行が伴わないということのたとえ。

【説】よく鳴く猫はあまり鼠を捕らないということから。

仲人口は半分に聞け

仲人は縁談をまとめるために、とかく相手の良いところばかりを話すから、仲人の話は半分割り引いて聞けということ。

情けが仇

好意や同情からしたことがかえって相手に悪い結果を招いてしまうこと。

情けは人の為ならず

人に尽くした情けは、いずれめぐりめぐって自分にかえってくるということ。

【説】情けは人のためではなく、自分のためであるの意から。なお近年「人に情けをかけるのはその人のためにならない」と解釈されることがあるが、それは誤りである。

梨の礫

こちらから連絡しても、まったく応答のないこと。

【説】「梨」は「無し」にかけた言葉で、「礫」は投げつける小石。投げた礫は決して返ってこないことから。

鉈を貸して山を伐られる

人のためと思って好意でしてやったことで、かえって自分が損害を受けることのとたとえ。

【説】貸してやった鉈で、自分の山を伐られてしまうの意。

【類】庇（ひさし）を貸して母屋をとられる

夏は日向を行け、冬は日陰を行け

身体を丈夫にするために、思いきってつらいことを

せよということ。また、人の行きたがるほうは人に譲って、自分は控えめに人が行きたがらないほうにいるようにせよという教え。

【説】夏にあえて暑い日向を歩き、冬にはあえて寒い日陰を行くように、進んで厳しさを求めて自分を鍛えよということ。

七重の膝を八重に折る

非常に丁寧にした上にさらに丁寧に頼み事をしたり、お詫びしたりする様子。

【説】実際には折れない膝を七重、八重に折るほど腰を低くする意から。

七転び八起き

何度失敗しようとかくじけないで、立ち直ること。また、人生の浮き沈みが激しいことのとたとえ。

【説】七度転んで八度起き上がるの意から。「七転八起（しちてんはつき）」とも言う。

七度尋ねて人を疑え

物がなくなつた時には、自分で丹念に探してみるこ
とが先決で、軽々しく人を疑ってはならないとい
うこと。

【説】七回探しても見つからないとき、はじめて人を疑え
の意から。

【反】人を見たら泥棒と思え

名のない星は宵から出る

最初のほうに出てくるものには、とかくたいしたもの
はないというたとえ。また、心待ちにしている人
はなかなか現れず、待ってもいないどうでもいい人
物が早くやって来るといふことのとたとえ。

怠け者の節句働き

ふだん怠けている者に限って、世間の人が一斉に休
む節句の日などにわざと忙しいふりをして働くもの

であるということ。

【説】「節句」は「節供」とも書く。「横着者（おうちやくもの）の節句働き」とも言う。

なまびようほう おおけが

生兵法は大怪我のもと

いい加減な知識や技術で事を行うと、かえって大失敗を招くということ。また、未熟者がいい加減な知識や技術をもちいて身を危険にさらすこと。

【説】「生兵法」はなまかじりの兵法や武術のこと。しっかりと身につけていない兵法や武術に頼ると大怪我をするだけだということから。

なまよ ほんしようたが

生酔い、本性違わず

酒に酔ったからといって、その人の本来の性質は変わるものではなく、本心を失うようなことはないということ。

【説】「生酔い」は少し酒に酔つこと。「酒飲み本性違わず」とも言う。

なめくじ しお 蛞蝓に塩

すっかり元気がなくなってしまうことのたとえ。また、苦手なものが出てくると、からきしだらしく萎縮してしまふことのたとえ。

【説】蛞蝓に塩をかけると体が縮んでしまふことから。

【類】青菜に塩

なう

習うより慣れよ

物事は人から習うよりも、実際に経験を積んで慣れたほうが身につくということ。また、机上の学問だけでは不十分で、実地の経験が大切だということ。

かんじん

ならぬ堪忍、するが堪忍

かんじん

本当の堪忍とは、これ以上は我慢できないということと、ころを耐え抜くことをいう。最後の最後まで堪忍しとおさなければ、それまでの堪忍がむだになるということ。

習ならわぬ経きやうじは読よめぬ

知識も経験もないことは、いくらやれと言われてもできないということ。

【説】読み方を習ったことがなければ、難しいお経を読めるはずがないという意から。

名なを取とるより得とくを取とれ

名誉や名声を求めるとは、実際の利益を得ることを考えたほうがよいということ。

【説】「名を捨てて実を取る」とも言う。

に

二階にかいから目薬めぐすり

じれつたいことや、まわりくどくて思うような効果が得られなかったりするこのたとえ。

【説】二階から一階にいる人に目薬をさしてやるようなもの意から。「天井から目薬」とも言う。

逃にがした魚さかなは大きおおい

一度手に入れかけて、もう少しというところで逃してしまったものは、くやしさが倍増して、ことさらすばらしく思えるというたとえ。

【説】捕まえそこなつた魚は実物よりも大きく思えるの意から。「逃げた魚は大きい」「釣り落としした魚は大きい」とも言う。

握にぎれば拳こぶし、開ひらけば掌てのひら

物事はたとえ同じものでも、それに対する気持ちの持ち方次第で変化するということ。

【説】同じ手であっても、握り締めれば人を殴る拳になり、開けば人をなでる手のひらになるの意から。

憎にくまれこっよ子、世よにはばかる

人から憎まれたり疎まれたりする者は、生活力が旺盛なので、そういう者に限って世間に出ると出世して幅をきかせたりするということ。

【説】「はばかる」は幅をきかす意。

逃にげるが勝かち

場合によっては、その場は逃げて相手に勝ちを譲るほうが、結果的に勝利や利益を得ることにつながるというたとえ。また、愚かな争いはしないほうがよいという意でも言う。

【類】三十六計逃げるに如（し）かず／負けるが勝ち

錦にしきを衣きて夜よる行くが如ごとし

出世しても、生まれ故郷に帰って人々にその立派な姿を見てもらえなければ、出世したかいないということ。

【説】美しい錦の着物を着いても暗い夜道を歩くのでは、誰にも見てもらえないの意から。

【出】漢書

二に足そくの草鞋わらじを履はく

二種類の異なる仕事を一人ですることのたとえ。

【説】昔は、ばくち打ちたちが、自分たちを取り締まる目明かしの役を兼ねることを言った。

似にた者もの夫婦ふうふ

夫婦になる男女は、性格や好みがどこか似ているということ。また、一緒に暮らしているうちに夫婦は似てくるということ。そうした夫婦の取り合わせを言う。

日光にっこうを見みずして結構けつこうというな

日光東照宮の、すばらしい建築美をほめたたえた言葉。

【説】日光東照宮を見ないうちは「結構」というほめ言葉

を使うなどの意で、「日光」と「結構」を語呂合わせにした表現。

【類】ナポリを見てから死ぬ

似て非なるもの

にせもの、まがいもの、いかがわしいものなどをいう。

【説】外見はよく似ているが、本質が違ふものの意から。

【出】孟子（もうし）

煮ても焼いても食えぬ

に どうにも手が負えず、もてあます様子。手段のないさまのたとえ。

【説】食べ物なら煮るか、焼くかすれば食べられるのに、どのように料理しても食えないの意から。

二度あることは三度ある

に どう 同じようなことが二度も続いて起きれば、もう一度起こる可能性が高いので、十分に用心したほうがよ

いということ。

二兎を追う者は一兎をも得ず

に と お もの いっ と え 一度に二つのものを得ようと欲張ると、どちらもうまくいかななくなるといったとえ。

【説】二羽の兎（うさぎ）を同時に追いかけて捕えようとする者は、結局一羽すら捕まえることができないの意から。

【類】虻蜂（あぶはち）取らず／欲の熊鷹（くまたか）股（また）裂くる／一も取らず二も取らず

【反】一挙兩得／一石二鳥

二の舞を演じる

に まい えん 前の人と同じ失敗をしてしまうこと。古くは人の後に出てそのままねをすることを言った。

【説】雅楽の「二の舞」から出た言葉。「案摩（あま）」の次に演じられる舞で、「案摩」の舞をまねて失敗するといふ筋立てであることから。

女房、鉄砲、仏法

女性の力によって雰囲気や和やかになり、鉄砲の威力によって治安が保たれ、仏法によって人は正しい心に導かれ、この世がうまく治まることを言ったもの。

【説】「房（ぼう）」「砲（ぽう）」「法（ぽう）」と語呂を合わせて調子よく言った言葉。

女房と畳は新しいほうがよい

新しいものは何でも気持ちがいいというたとえ。

【説】女房と畳は新しいほうが新鮮で気分がいいという意から。

【反】女房と味噌（みそ）は古いほどよい

女房と味噌は古いほどよい

味噌は古くなるほど熟成して味がよくなる。女房も長く連れ添うにつれて、互いの理解が深まり円満さも増していくということ。

【反】女房と畳は新しいほうがよい

女房の妬くほど亭主もてもせす

妻はちよつとしたことでやきもちをやくが、思っているほど夫はもていないということ。

忍の一字は衆妙の門

忍耐することは成功への第一の要件。耐え忍ぶことを身につければどんなことでもできるということ。

【説】「衆妙の門」は万物の深遠な道理の入口の意。

【類】ならぬ堪忍するが堪忍

ぬ

ぬか
糠に釘

なんの手応えもなく、無意味でなんの役にも立たないことのとたとえ。

【説】糠に釘を打つてもまるで手応えのないことから。

【類】豆腐に鏝（かすがい）／暖簾（のれん）に腕押し

抜かぬ太刀の高名

力量がありながらその力を使わずに我慢して争わずにいるほうが、かえって人から重んじられて名を上げる。また、口では立派なことを言うが、実際に實力を示したことがない人をあざけって言う言葉。

【説】太刀を抜かずに名を上げるの意から。

【類】取らずの大関

抜け駆けの功名

人のすきをうかがったり、出し抜いたりして、自分だけ利益を得たり手柄を立てたりすること。

【説】「抜け駆け」は戦場で陣地をこっそり抜け出して人より先に敵陣に攻め入ること。転じて、人を出し抜いて

事を行うことを言う。

盗人に鍵を預ける

災難の原因となるものの手助けをしてしまい、気づかぬうちに被害を大きくしてしまつたとえ。また、悪人とは知らずに悪事の手助けになることをしてしまつたとえ。

【説】盗難を防ぐための鍵を、こともあろうに盗人に預けてしまつことから。

盗人にも三分の理

どんなことについても、もつともらしい理屈がつけられるものだといつたとえ。

【説】人のものを盗むのは許されぬはずだが、盗みをするにも正当化する三分ほどの理屈があるの意から。「泥棒にも三分の道理」とも言う。

盗人を捕えて見れば我が子なり

あまりの思いがけない事態に呆然（ぼうぜん）となつて、途方に暮れるたとえ。また、どんなに親しい者でも全面的には信用できないというたとえ。

【説】盗人を捕まえてみたら自分の子だったの意から。

濡れ手で粟

苦勞せずに、楽々と利益を上げることのたとえ。

【説】ぬれた手で粟をつかむと、つかんだ以上に粟粒がたたくさんくつついてくることから。「濡れ手で粟の掴（つか）み取り」とも言う。

濡れぬ先こそ露をも厭え

最初は恐ろしいと思っていた過ちも、ひとたび犯してしまつと、その後はよりひどいことでも平然とするようになってしまふというたとえ。また、男と女の仲は一度肉体関係を持つと、あとははずると深みにはまってしまうというたとえ。

【説】体がぬれないうちは、少しの露がかかるのさえ嫌う

ものだが、一度ぬれてしまえば、あとはどんなにぬれても気にしなくなることから。

濡れぬ先の傘

何事をするにも、失敗しないように事前の準備を怠らないたとえ。

【説】雨が降る前に傘を用意するの意から。「降らぬ先の傘」とも言う。

【類】転ばぬ先の杖（つえ）

猫に鯉節

間違いが起きる可能性のある状態をつくるたとえ。誘惑にかられてあやまちを起こしやすいたとえ。ま

た、危険で油断がならないたとえ。

【説】猫のそばに大好物の鯉節を置くと食べられてしまうことから。

猫ねこに小判こばん

どんなに貴重なものでも、その価値のわからない者にとつてはなんの役にも立たないというたとえ。また、効果がないこと、反応を示さないことのたとえ。

【説】人間にとつては貴重な小判でも、猫にとつては少しのありがたみもないことから。

【類】豚に真珠／馬の耳に念仏

猫ねこに木天蓼またたび

大好物のたとえ。また、与えれば効果が著しく現れるもののたとえ。

【説】「またたび」はマタタビ科のつる性植物で、猫の大好物。「猫に木天蓼、お女郎に小判」とも言う。

猫ねこの手も借りてかりたい

非常に忙しくて、誰でもいいから手伝ってくれる人がほしいというたとえ。

【説】役に立つはずのない猫の手でも借りたくなるという意から。

猫ねこの額ひたい

土地などの面積がきわめて狭いことのたとえ。

【説】猫の額が狭いとされるところから。

猫ねこも杓子しゃくしも

誰もかれも、みんな。

【説】一説には猫の手と杓子の形が似ているところから。女も子供も意の「女子（めこ）（＝女）も弱子（じやくし）（＝子供）も」の転じたものともいわれる。

寝ねた子こを起おこす

ようやく落ち着いた問題を蒸し返したり、余計なことをしてやっかいな事態をまた引き起こすたとえ。また、せつかく忘れかけていたことを思い出させるようなことをするたとえ。

【説】寝た子をわざわざ起こして泣かせる意から。

寝た間は仏ね ま ほとけ

苦労や心配があっても、寝ている間はすべて忘れて仏のような心になれるということ。また、どんなに悪人でも眠っている間は無心で仏のようであるということ。

【類】寝る間が極楽／寝るほど楽はない

寝ていて人を起こすなね ひと お

自分が働かないで人を動かそうとしてもうまくいかない。まずは自分が率先して模範を示せということ。

【説】自分は横着して寝たままでありながら、他人を起こすようなことはするな、の意から。

【類】率先垂範（そつせんすいはん）

寝耳に水ね みみ みず

まったく意外な思いがけないできごと。不意のことに驚くことのとえ。

【説】寝ている時に不意に耳に水を入れられて驚くことから。また、寝ている時に洪水の音を耳にして驚くことからもいふ。

【類】青天の霹靂（へきれき）／藪（やぶ）から棒

寝る子は育つね こ そだ

よく眠るのは健康な証拠で、そういう子供は丈夫に大きく成長するということ。

年貢の納め時ねんぐ おぎ とき

長い間悪いことをしてきた者がついに捕えられて罪に服すべき時。また、悪事に限らず、ずっと続けてきたことに見切りをつけて、改める時の意。

【説】 滞納していた年貢を清算する時の意から。

念ねんには念ねんを入いれよ

注意したり、確認した上にもさらに注意をせよの意。手抜かりのないように細かく気を配ること。

【説】 「念」は細かいところにも気を配り、注意する意。

【類】 石橋を叩（たた）いて渡る／浅い川も深く渡れ

の

能のうある鷹たかは爪つめを隠かくす

人より優れた能力を持つ人は、その才能をむやみに誇示することはしないというたとえ。

【説】 獲物をとる能力に秀でた鷹は、獲物を捕る時以外は鋭い爪を隠しているの意から。

能書のうしょ、筆ふでを扱えらばず

書の上手な人は、筆の良し悪しを選ぶことはせず、どんな筆でも立派な字を書くということ。

【類】 弘法筆を扱はず

【反】 下手の道具調べ

囊中のうちゅうの物ものを探さぐるが如ごとし

いとも簡単にできることのたとえ。

【説】 「囊中」は袋の中の意。まるで袋の中の物を手で探り取るようなものだという意から。

【出】 新五代史

残り物のこに福ふくがある

人が取った後、最後まで残っていたものには意外によい物がある。人とは争わない遠慮深い人に思いがけない幸運が恵まれるというたとえ。

【説】 「余り物に福がある」とも言う。

喉元過ぎれば熱さを忘れるのどもとす あつ わす

苦しいことでも、過ぎてしまえば忘れてしまうというたとえ。また、苦境の時に受けた恩も、楽になると忘れてしまうというたとえ。

【説】 熱いものを飲んでも、飲み下してしまえば、熱かった苦痛をけろりと忘れてしまつたの意から。

【類】 雨晴れて笠を忘れる／暑さ忘れれば陰忘れる／魚(ニッポ)を得て釜(ニッポ)を忘る

上り一日、下り一時のぼ いちじにす くだ ひとつとき

物事はつくり出す時には多くの時間と努力を必要とするが、壊れるのはあつという間だということ。

【説】 坂道を上るのには一日かかるが、下る時にはわずかな時間しかかからないの意から。

鑿と言えば槌のみ い つち

よく気がきくことのたとえ。

【説】 「鑿をとつてくれ」と言われたら、鑿を打つ槌も同時に添えて出すの意から。

乗りかかった船の ふね

いったん物事を始めたり、かわりを持ってしまつた以上、途中でやめるわけにはいなくなることをたとえ。

【説】 乗った船がいったん岸を離れば、目的地に着くまで船から途中で降りることはできないの意から。

暖簾に腕押しのれん ついでお

相手がこちらに応ずるような反応がまるでないことのとえ。手応えも張り合いもないことのとえ。

【説】 暖簾を相手に腕押し(腕相撲)をするようなものだという意から。

【類】 糠(ぬか)に釘(くぎ)／豆腐に鋸(かすがい)

敗軍の将は兵を語らず

失敗した者にはそのことについて弁解する資格がないということ。

【説】「兵」は兵術・兵法。戦いに敗れた将軍は武勇について話す資格がないの意から。

【出】史記

背水の陣

決死の覚悟で事に当たることのたとえ。

【説】川や湖を背にして陣を構えること。後退すれば水におぼれるため、兵士が決死の覚悟で戦うからよいとする戦法。中国・漢の韓信（かんしん）が用い、捨て身の態勢で戦い、ついに敵を破った故事から。

【出】史記

這えば立て、立てば歩めの親心

子供のすこやかな成長を願う親の気持ちを川柳の形にした言葉。

【説】子供がはうようになれば、早くつかまり立ちができるようにならないかと思ひ、立つようになれば、早く歩けるようにならないかと思ふ親の気持ち。

謀は密なるを貴ぶ

計略は外部に知られないことが何よりも大切だということ。

【説】「謀は密なりを良し」とも言ひ。

【出】三略

掃き溜めに鶴

環境のよくない所、薄汚い所に不釣り合いなほど優れたもの、美しいものが現れることのたとえ。

【説】「掃き溜め」はごみ捨て場。汚い掃き溜めに舞い降

りた美しい鶴の意から。

【類】 鶏群の一鶴（いっかく）

ばきやく あらわ

馬脚を露す

隠していた本性や悪事がばれてしまうこと。

【説】 芝居で馬の足を演じているのが人間であることが露見してしまふことから。

【類】 化けの皮が剥（は）がれる／尻尾（しっぽ）を出す

はくひやくいふ

薄氷を履むが如し

びくびくしながら危険をおかすことのとたとえ。

【説】 その危険なことといったら、いつ割れるかわからない薄氷の上を歩くようだということ。

【出】 詩経【類】 危うきこと累卵（るいらん）の如し

は

化けの皮が剥がれる

真相や素性（すじょう）などを包み隠していた外見がとれて、正体が現れることのとたとえ。

【説】 「化けの皮」は、素性などを隠すためのうわべのもの意。

【類】 馬脚を露（あらわ）す／尻尾（しっぽ）を出す

はし あたま か しだい

恥と頭は掻き次第

どれほど恥をかいてもいっこうに平気で、恥ずかしい行いを重ねていくこと。

【説】 頭を自由に掻くように、恥をかき続けてもまるで気にとめないこと。

はし

箸にも棒にも掛からぬ

どうにも取り扱えないことのとたとえ。また、何も取り柄がないということ。

【説】 小さな箸にも大きな棒にも引つかからないの意から。

はちじゅうはちや

八十八夜の別れ霜

立春から数えて八十八日目に当たる八十八夜（五月二日頃）の頃の霜を最後にして、それ以後は天候も

落ち着き、霜も降りなくなるといふこと。種子まき時期の目安として言う言葉。

【説】「別れ霜」はその年最後に降りる霜のこと。

はつものしちじゅうごにち

初物七十五日

初物を食べると、寿命が七十五日延びるといふこと。

【説】「初物」はその季節に初めてできた穀物・野菜・果物など。また、盛りの季節に先駆けて獲れたはしりの魚などをいふ。初物のうまさ、新鮮さを珍重する言葉。

はと まめでしほ

鳩が豆鉄砲を食ったよう

思いがけないことに驚いて、目を見張ったり、きよとんとしている様子のたとえ。

【説】「豆鉄砲」は豆を弾にしたおもちゃの鉄砲。鳩が豆鉄砲で好物の豆をぶつけられて、丸い目をいっそう丸くしてびっくりしている様子から。

はないつとき ひとひとなか

花一時、人一盛り

花が美しく咲き誇るのもわずか数日間であるように、人間も華やかな時期はごく短い一時期にすぎないといふこと。

【類】花七日（はななぬか）

はな あらし

花に嵐

よいことにはとかく邪魔が入りがちだといふたとえ。

【説】花が咲くと激しい風が吹いて、せっかくの花を散らしてしまふの意から。

【類】月に叢雲（むらくも）花に風／好事魔多し

はなぬすびと ふうりゅう

花盗人は風流のうち

花の美しさにひかれて花の枝を折って盗むのは、花の美しさにひかれたあまりのことで、風流心の表れであるから、とがめだてるには及ばないといふこと。

【説】花（特に桜）の枝などをつい折った時の言い訳などとして使われる。

花は桜木、人は武士

花では桜、人の中では武士が最も優れているということ。

【説】花の中では桜の花が一番美しい。また人では、桜の散り際に似て死に際の潔い武士が一番であるということ。
また、桜がぱつと咲いてぱつと散るように、武士はいつでも潔く死ねる覚悟がなくてはならないということ。

花は根に、鳥は古巢に

経過はいろいろでも、物事はすべてその元に帰るといったとえ。

【説】花は咲き終わると木の根元に落ちて肥料となり、飛んでいる鳥もいずれば自分の巢へ帰ることから。「花は根に帰る、鳥は古巢に帰る」とも言う。

花も実もある

外見が美しいだけでなく、中身も充実している。ま

た、道理も人情もわきまえた処理の仕方などのたとえ。

【説】木や枝に美しい花が咲くだけでなく、実もつきの意から。

花より団子

風流なことよりも実益を、外観よりは内容を大切にすることのたとえ。また、風流が解（わ）からないことのたとえ。

【説】花の美しさを楽しむより、団子を食べるほうがよいという意から。

【類】花の下より鼻の下

歯に衣着せぬ

遠慮しないで、思ったまままずけずけとものを言う様子。相手にとって多少不快なことや厳しいこともはっきり言うこと。

はやお さんりょう けんやんびりょう
早起き三両、俵約五両

早起きと俵約は共に大きな利益になるというたとえ。

【説】早起きすると三両、俵約すると五両の得になるの意から。

はやお さんもん とく
早起きは三文の徳

早起きをする、なにかと得をすることがあるというたとえ。

【説】「徳」は「得」と同じ。「早起きは三文の得」とも言う。もともとは早起きしても三文の得にしかならないの意であったといわれている。

はやめし げい うち
早飯も芸の中

食事を早く済ませることも才能の一つだということ。

もの すた もの
やはり物は廃り物

流行は一時的なもので長続きせず、やがては廃れて

しまつということ。

はら へ いくせ
腹が減っては戦ができぬ

何をするにも十分な用意がいるというたとえ。

【説】空腹では力が入らなくて戦争などとてもできない。なにはともあれ、まず腹ごしらえをしてからというたとえ。

はら いちもつ
腹に一物

心の中に、何かたくらみを抱いていること。

【説】「腹」は心の内の意。「胸に一物」とも言う。

はら かわ は め かわ
腹の皮が張れば目の皮がたるむ

お腹がいっぱいになると、眠くなること。満腹になって腹の皮が突っ張ると、逆にその分だけ目の皮がたるんで眠くなるということ。

はら ちぶ い しやい
腹八分に医者要らず

満腹するまで大食せずに、腹八分目ぐらいにしてお

けば、健康を損なうことなく、医者にかかるようなこともないというたとえ。

腹も身のうちはらみ

腹も自分の体の大事な一部なのだから、食欲にまかせての暴飲暴食は慎み、いたわるべきだという戒め。

針ほどのつとを棒ほどに言はりぼういつ

小さなことを大げさに言ったり、考えたりするたとえ。

【説】針ぐらゐであるものを棒ほどの大きさに言う意から。

【類】針小棒大（しんしょうぼうだい）

万事休すばんじきゅう

これ以上手の打ちようがなく、もはやどうしようもなくなった、すべてがおしまいだ、お手上げだ、と、いうこと。

【説】「万事」はあらゆること。「休す」はそれだけで終わる、あとが続かないの意。

【出】宋史（そうし）

ひ

鼻肩ひいきの引き倒ひたおし

ひいきが度を越えて、かえってその人に迷惑をかけるしてしまうこと。

【説】気に入って引き立てている者を、より引き立てようと力を入れすぎて、結果的に引き倒してしまうの意から。

日陰ひかげの豆も時まめときが来ればくはぜる

年頃になれば誰でも一人前になるから心配はいらないというたとえ。また、たとえ時間がかかろうとも、その時期になれば事は自然に成るものだということ。

【説】日陰に生えている豆も時期がくれば自然にはじけ出

るの意から。

光るほど鳴らぬ ひか な

口うるさい人に限って、それほど怖くはないことのとえ。また、口では偉そうに言っている者に限って、たいした技量は持ち合わせていないということ。

【説】すさまじい稲光の割には、雷鳴は小さいの意から。

引かれ者の小唄 ひ もの こうた

何かに失敗して内心ではびくびくしている者が、負け惜しみで強がりを行い、わざと平気なふりをしてみせることのとえ。

【説】「引かれ者」は、江戸時代、裸馬に引かれて刑場へ連れて行かれる罪人のこと。引かれ者が平静を装い、虚勢を張って小唄を口ずさんだことから。

低き所に水溜まる ひく ところ みずた

物事は条件が整っている所へと集中するものである。

また、利益のあるものに、自然と人は集まるといったとえ。

【説】低い所に水が流れ込んでたまるという意から。

【類】窪（くぼ）い所に水溜まる

日暮れて道遠し ひく みちとお

年老いてしまったのに、まだ目的が達成されないことのとえ。また、期限が迫っているのに仕事か思うように進まず、とうてい終わりそうにないたとえ。

【説】日が暮れてしまったのに、目的地までの道のりはまだはるかにあるの意から。

【出】史記

卑下も自慢のうち ひげ じまん

表面はいかにも謙遜したふうでありながらも、実は人をうらやましがらせることを意識しながら話す様子。必要以上にへりくだることは自慢の一種であるということ。

庇を貸して母屋を取られる

好意からごく一部を貸しただけなのに、つけ込まれて最後には全部を取られてしまうというたとえ。また、恩を仇（あだ）で返されるたとえ。

【説】親切心から庇を貸したのに、ついには母屋まで取られてしまうの意から。「軒を貸して母屋を取られる」とも言ふ。

【類】鉞（なた）を貸して山を伐（き）られる

膝とも談合

頼りにならないような相手でも相談してみれば、それなりの成果はあるというたとえ。

【説】「談合」は相談の意。困った時には自分の膝でも相談相手になるの意から。考えなどがまとまらない時、膝を抱えて膝と向き合う形になるが、それが膝に相談しているように見えることから。

【類】物は相談

顰に倣う

事の善し悪しを考えずに、やたらに他人の真似をすること。また、自分が他人の言動を真似ることを謙遜しても言う。

【説】「顰」は眉間にしわを寄せること。中国・越の西施（せいし）という美人が、胸を病んで辛そうに顔をしかめている様子が一段と美しいのを見て、村の娘たちがみな胸を押さえ、眉間にしわを寄せる表情をしたという故事から。

【出】莊子

尾大、掉わず

下の者に力量がありすぎると、上の者は下の者を制御しにくくなることのたとえ。また、臣下の勢力が強大になって、君主の自由にならなくなることのたとえ。

【説】動物の尾が体に比べて大きいと、自分の力で自由に

尾を動かせないの意から。

【出】春秋左氏伝

ひつぶ ゆう

匹夫の勇

深く考えずに、ただ腕力に頼るだけの勇氣。血気にはやってむやみに強がること。

【説】「匹夫」は身分の低い男、教養のない男の意。

【出】孟子（もつし）

ひととお

人衆ければ天に勝つ

人数が多く威勢のいい時は、道理に合わないことをしても一時的には天の理に勝つこともあるということ。しかし、それに対してはやがて天罰が下る。

【説】「衆ければ」は「多ければ」の意。大勢の力が強大な時は、天が示す道理に逆らってもそれが通るといこうとから。

【出】史記

人こそ人の鏡

他人の言動は、自分の至らない点を正すよい手本となるということ。

【説】鏡を見て自分の姿かたちを正すように、他人の言動を見ること。

【類】他山の石

ひとだけ

人酒を飲む、酒酒を飲む、酒人を飲む

酒の飲み始めは楽しんで飲むが、そのうちただ惰性で酒を飲むようになり、やがては酒に飲まれて、悪酔いしてしまうということ。酒はほどほどに飲めという戒め。

ひと

人と屏風は直ぐには立たぬ

人間正しいと思うことをやみくもに通そうとするだけで、他人と折り合わなければ、世の中をうまく渡っていけないというたとえ。

【説】「直ぐ」は真つ直ぐの意。屏風は折り曲げないと立たないように、人間も真つ直ぐなだけではだめの意から。

人の噂も七十五日

噂は長続きしないから気にするなということ。

【説】世間で人が噂をするのも一時的なもので、七十五日もすれば飽きられ、自然に忘れられてしまうの意から。

人の口に戸は立てられぬ

世間の噂話は防ぎようがないということだ。

【説】家の戸を閉めるように、人の口を閉めることはできないということから。「世間の口に戸は立てられぬ」とも言う。

人の心は九十分

人の考えることは似たようなもので、大差はないということ。

【説】「人の心は九合（くごう）十合」とも言う。

人の子の死んだより我が子の転けた

人間は誰でも自分の利害を重視する、気にかけるということのたとえ。

【説】他人の子が死んだことよりも、自分の子が転んだことの方が一大事だという意。親にとって自分の子ほどかわいくて大切なものはないということ。

人の牛蒡で法事する

自分が果たさなくてはならない義理を、他人のものを利用して済ませることのたとえ。

【説】他の人が持つて来た牛蒡で精進料理を作り、法事のもてなしをするの意から。

人のふり見て我がふり直せ

他人の姿や行動を見ることによって、自分の悪い点を改めるよう心がけよということ。

【説】「ふり」は姿や態度・行いのこと。

【類】他山の石／人こそ人の鏡

人の禪で相撲を取る

他人のものを利用して、抜け目なく自分の目的を果たそうとするたとえ。

【説】自分のまわしは使わずに、他人のを借りて相撲を取るの意から。

【類】人の牛蒡（ごぼろ）で法事する

人は見かけによらぬもの

人は外見だけでは、その能力や性質などを判断できないものである。外見と中身は往々にして異なることが多く、意外な一面を持っているものであるということ。

人は病の器

人の体は、様々な病気にかかりやすいことのとたとえ。

【説】人間の体は、複雑かつ微妙にできているから、ちょっとしたことが原因で故障し、病気になるやすい。まるで病気の入れ物みたいなものだという意から。

人、木石に非ず

人間は木や石と違って、喜怒哀楽さまざまな感情を持っているということ。

【説】単に「木石に非ず」とも言う。

【出】白居易

一人口は食えぬが二人口は食える

一人暮らしはいろいろむだが多くて生計を立てにくい、結婚して夫婦二人で暮らせば経済的に得だし、家計をしっかりと切り盛りするようになるので、なんとか食べていけると言うこと。

【説】二人口は過ごせるが一人口は過ごせぬ」とも言う。

一人娘と春の日はくれそうであくれぬ

一人娘は親が嫁にやるのを惜しがるので、とかく縁遠くなりがちだということ。

【説】春の日が長くてなかなか暮れないことから、「暮れる」と嫁に「呉れる」をかけて言ったもの。

人を怨むより身を怨め

他人の態度や行為を恨むより以前に、まず自分の努力の足りなさ、至らなさを反省せよということ。

【出】淮南子（えなんじ）

人を呪わば穴二つ

人に害を与えれば、それがいつか自分の身にも必ずはね返ってくるものだということ。

【説】「穴」は墓穴のこと。人を呪い殺せば自分もその報いを受けて殺される。だから、相手と自分を埋めるための二つの墓穴が必要になるの意から。

人を見たら泥棒と思え

ひ

他人はとかく信用できないものだから、まず用心したほうがよいということとえ。

【対】七度（ななたび）尋ねて人を疑え

人を見て法を説け

相手をよく見きわめて、相手に適したやり方でものを言えということとえ。

【説】人を説得したり諭（さと）したりする場合は、相手の人となりを見定め、相手に適した形で仏法を説けの意から。「人」は「にん」とも読む。

火のない所に煙は立たぬ

火種のない所に煙が立つはずがないように、根拠のないところには噂は立つものではないということのたとえ。

【説】噂が立つには必ずそれを裏付けるなんらかの根拠があるはずだということ。

火は火元から騒ぎ出す

最初に騒ぎ出した者が、その事を引き起こした張本人であることが多いということ。

【説】 火事が出た場合、まず火事を出した所から騒ぎ出すの意から。

【類】 屁（へ）と火事は元から騒ぐ

ひもじい時にまずい物なし

空腹の時にはどんなものを食べてもおおいしく感じられるということ。

【説】 「ひもじい」は腹が減っている意。「ひだるい時にまずい物なし」とも言う。なお「ひだるい」もひもじいの意。

百害あって一利なし

弊害ばかりたくさんあって、利点はまったくないということ。悪い影響を及ぼすだけで良いことはなにもない。

百日の説法、屁一つ

長い間苦勞をしてきたことが、ほんのちよつとした失敗のために、むだになってしまふことのたとえ。

【説】 百日間も厳かにありがたい説法を説き続けてきたお坊さんが、おならを一つしたために、厳肅な雰囲気かわれ、せつかくの説法のありがたみが消し飛んでしまうの意から。

【類】 九仞（きゅうじん）の功を一簣（いっさい）に虧（か）く／磯際で船を破る

百日の勞、一日の樂

働くばかりでなく、時には休むほうがよいということ。
【説】 百日も長い間労働したら、一日ゆつくりと休養するのがよいの意から。

【出】 孔子家語（こうしけご）

百聞は一見に如かず

ひやくぶん いっけん し

人の話を何度も聞くよりも、実際に自分の目で見て確かめるほうが、よくわかるということ。

【説】百回も人から聞いて知ることは、実際に一回見ることに及ばないの意から。

【出】漢書

ひやくり いもの くじゅうり なか

百里を行く者は九十里を半ばとす

何事もあともう少しというところを乗り越えるのが苦しくむずかしい。だから、九分通り済んだあたりを半分と心がけよということ。

【説】百里の道を行くこととする者は、九十里まで来てやっと半分歩いたと考えよの意から。

【出】戦国策

ひょうたん こま で

瓢箪から駒が出る

起こるはずがないことが起こったり、冗談で言ったことが本当になってしまったことのとたとえ。

【説】「駒」は馬のこと。瓢箪から出るはずのない本物の

馬が飛び出す意から。「瓢箪から駒」とも言う。

【類】灰吹きから蛇(じゃ)が出る

ひょうたん なます お

瓢箪で鯨を押さえる

どうとらえてよいのか見当がつかない、また、さっぱり要領を得ないことのとたとえ。

【説】丸くてつるつるした瓢箪では、ゆるゆるした鯨を押さえつけることができないの意から。略して「瓢箪鯨」とも言う。

ひょうたん つ がね

瓢箪に釣り鐘

差がありすぎてまるで比べものにならないもの。また、釣り合いがとれないことのとたとえ。

【説】瓢箪も釣り鐘も同じようにぶら下げることができるが、重さも大きさも全く違っていることから。

ひん どん

貧すれば鈍する

貧乏すると、日々の暮らしのことで頭がいっぱいに

なり、物事に対して鈍感になり心がさもしくなるということ。

貧ひんにして楽たのしむ

貧しい境遇にあっても、天命に従って正しい道を行うことを楽しむ。また、貧乏は貧乏でもそれ相應の楽しみ方があるということ。

【説】君子の心境・心得を言った言葉から。

【出】論語

貧乏びんぼうひんま暇なし

貧乏で生活に追われ、働かなくてはならないから、休む暇もないということ。

風前ふうぜんの灯火ともしび

人の命のはかなさのたとえ。また、危険にさらされて、今にも滅びてしまいうような様子のたとえ。

【説】風が吹きつける所にあつて、すぐにでも消えてしまいうそに揺れている灯火の意から。

【類】風の前の塵(ちり)

夫婦喧嘩ふうふげんかは犬いぬも食くわぬ

夫婦喧嘩はたいていつまらないことが原因で起こり、そのうち仲直りするのが落ちである。だから、他の人が親身になって心配したり、仲裁したりするのはかばかしいということ。

【説】たいていのものは食べてしまう犬でさえ、夫婦喧嘩には見向きもしないの意から。

夫婦ふうふは合あわせ物もの、離はなれ物もの

夫婦とは、もともと他人が一緒になったもの。だか

ら、ちょっとしたことでも再び別れてしまうことも不思議ではないということ。

【類】 合わせ物は離れ物

ふえふ

おど
笛吹けども踊らぬ

あることをさせようと準備を整えて、さかんに誘ったり促したりしても、応じる者がいないたとえ。

【説】 踊らせようといくら笛を吹いても、誰も踊らないの意から。

【出】 新約聖書

ふくすい ほん かえ
覆水、盆に返らぬ

一度離婚してしまった夫婦を再び元に戻すこととはできないというたとえ。また、一度してしまったことは、二度と取り返しがつかないというたとえ。

【説】 「覆水」はこぼれた水。「盆」は水や酒などを入れる容器。一度こぼれた水は、再び元の鉢に戻らないの意。

ふぐ く いのち お
河豚は食いたし命は惜し

うまいフグ料理は食べたいが、毒にあたって命を落とすのも怖い。いい思いはしたいが、隣り合わせの危険やあとのたたりも怖いので、どうしたらよいか迷うことのたとえ。

ぶし にごん
武士に二言はない

武士は信義と面目を重んじるから、一度口にした言葉をやさく否定してしまうことはない。言ったことに必ず責任を持つということ。また、一度約束したことは必ず守ることのたとえ。

【類】 男子の一言（いちごん）金鉄の如（ごと）し

ぶし あいみ たが
武士は相身互い

武士仲間と同じ立場にあるのだから、互いに理解し合って助け合うべきだということ。転じて、同じ立場・境遇にある者同士は、思いやりを持ってお互い

に助け合おうというたとえ。

【説】「相身互い」は「相身互身（あいみがいみ）」のこと。同じ立場の者が同情し助け合うことや、そういう間柄の意。

武士は食わねど高楊枝

武士は貧しくて食事ができない時でも、十分に食べたふりをして楊枝（ようじ）を悠然と使い、ひもじさなど微塵（みじん）も見せないということ。武士は貧しくても人に弱みを見せずに、氣位を高く持つて生きるべきだということとえ。

【説】「高楊枝」とは食後にさも満腹したようにゆったりと楊枝を使うこと。

【類】鷹（たか）は飢えても穂を摘まず

豚に念仏、猫に経

ありがたい教えも、理解できない者にとってはなんの効果もなく、ありがたいたくもないこと。

【説】豚に念仏、猫にお経を聞かせても、そのありがたみはわからないことから。

【類】馬の耳に念仏／犬に論語

船は帆でもつ、帆は船でもつ

世の中は持ちつ持たれつとの関係で、互いに助け合つて成り立っていることのたとえ。

【説】船は帆があるから走れるし、帆は船がなければその意味がないという意から。

文は遣りたし書く手は持たず

恋文を書き送りたいが、文字も知らなくて書けないし、代筆を頼むのも恥ずかしい。恋心を伝えることがままならず、やきもきする心情をいう。

古川に水絶えず

昔からの金持ちは落ちぶれてしまっても、なにかしらの財産や宝物が残っているというたとえ。また、

立派ないわれのあるものは、衰えても昔の名残をとどめ、減びてしまうことはないというたとえ。

【説】涸（か）れてしまったように見える古い川でも、細々と水は流れていて絶えることがないの意から。

勿頸の交わり

きわめて親しく、堅い交際のたとえ。

【説】「勿頸」は頸（くび）首（く）を刎（は）ねること。その友人のためならば、首を刎ねられても後悔しない、それほどの交際の意から。なお、この交わりを結ぶ親友を「勿頸の友」と言ひ。

【出】史記【類】金石の交わり／管鮑（かんぼう）の交わり

分別過ぐれば愚に返る

物事はあまり深く考えすぎると、かえってつまらない考えに陥ってしまふということ。

【説】「分別」は思慮の意。

【類】過ぎたるは猶（なほ）及ばざるが如（ごと）し

平地に波瀾を起す

穏やかなところにしいて波風を立てること。好んでもめごとや争い事を起こすことのたとえ。

【説】「波瀾」はさわぎ、もめごとの意。平らなところに波を立てるの意から。

【出】劉禹錫（りゅうじやく）

兵は神速を貴ぶ

戦争には迅速な作戦・行動が第一。兵を動かすときはなによりもまず、迅速なことが大切だということ。

【説】「兵」は軍隊、戦争、「神速」は神業のように速いの意。

【出】魏志

臍で茶を沸かす

非常におかしいので、笑わずにはいられない。またあまりにばかっているので大笑いせずにはいられないことのたとえ。

【説】「臍で茶を沸かす」、略して「臍茶」とも言う。

下手があるので上手が知れる

上手な人ばかりだと、誰が本当に上手か判断できない。下手な人がいるからこそ、上手な人が目立ってわかるということ。

【説】下手な人をかばうのに用いる言葉。あるいは、下手な人の自己弁護にも使われる。

下手な鉄砲も数撃ちや当たる

下手なものでもあれこれ数多く試みてみれば、まぐれ当たりということがある。また、少しやってみてうまくいかないからと簡単にあきらめずに、幾度も挑戦してみれば成功するものであるということ。

【説】下手な鉄砲撃ちでも、弾をたくさん撃っているうち

には命中することもあるの意から。

下手の考え休むに似たり

時間をむだにするだけで何の効果もないこと。下手な者が時間をかけても、よい考えが浮かぶわけでもないから、休んでいるのと同じということ。

【説】将棋の下手な差し手がよい手を思いつくはずもないのに、じっと考え込むのは休んでいるのと同じであるの意から。

下手の道具調べ

よい道具があったところで、たいしたことでもできない仕事の下手な者に限って、道具にあれこれと注文をつけ選びたがるということ。

【説】「下手の道具立(だ)て」とも言う。

【対】弘法(こうぼう)筆を扱はず／能書筆を扱はず

下手の長糸、上手の小糸

仕事の下手な人ほどむだなことをし、上手な人ほど要領よくやるといふたとえ。

【説】「小糸」はちょうど必要なだけの短い糸の意。裁縫の下手な人は必要以上に長い糸を針に通して縫いにくくする。上手な人は必要なだけの糸を使って手際よく仕事をするといいこと。

下手の横好き

下手なくせにその物事をするのが大好きで、熱心であること。

【説】「横好き」は専門でないもの、また、上手でないものがやたらに好きなこと。

【対】好きこそ物の上手なれ

蛇に見込まれた蛙

非常に恐ろしいものや苦手なものなどの前に出て、身がすくんで動きが取れなくなる状態のたとえ。

【説】蛙は蛇に狙われると恐ろしさのあまり動けなくなる

ことから。

屁を放って尻窄める

失敗をしてから、急いでごまかしたり、体裁を取り繕ったりしようとするたとえ。

【説】人前でおならをしてしまったから、慌てて尻を縮めることから。

弁慶の泣き所

向こう脛(ずね)、または、中指の第一関節から先のこと。転じて、その人の弱点や急所のたとえ。

【説】そこを蹴られれば弁慶ほどの豪傑でも、痛くて泣く急所の意から。

へら増しは果報持ち

年上の女性と結婚すると良いことがあるの意。

【説】「へら増し」は年上の女房のこと。一つ上は一本べら、二つ上は二本べらという。

忘形の交わり ぼうけい まじ

身分や貧富の差などに隔てられることのない、きわめて親しい交わり。

【説】「忘形」は相手の地位や身分、風采など外形的なことにとらわれないこと。このような交わりを結ぶ親友を「忘形の友」と言う。

【出】唐書(とうじよ) 【類】忘年の交わり

ぼうす にく

坊主憎けりや袈裟まで憎い ぼうす にく

あまりにもその人を憎いと思うと、その人にかかわりのあるすべてが憎らしく思えてくるということ。

【説】僧侶(そうりよ)を憎いと思うと、着ている袈裟までが憎く思えてくるの意から。

ぼうす はなかんざし

坊主の花簪

似つかわしくないものなたとえ。持っていてもなんの役にも立たないものなたとえ。

【説】「花簪」は造花などをつけて飾りたてたかんざし。本来、若い女性とは無縁であるはずの僧侶が花簪を持っているという意から。また、髪のない僧侶にかんざしは無用のものであることから。

ぼうちゆう かん

忙中、閑あり

忙しい仕事の合間にも、一息つく時間はあるものだということ。

【説】「忙中」は多忙の最中、「閑」は暇の意。

ぼう ねが

棒ほど願って針ほど叶う ぼう ねが はり かな

大きな願望を持っていても、ほんのわずかししか叶えられないというたとえ。

【説】棒ほどの大きな願い事も、針ほどのものしか叶えら

れないの意から。

【ほぞか】 臍を噛む

及ばないことを悔やむたとえ。後悔してもどうにもならないことのとたとえ。

【説】「臍」はへそ。自分のへそを歯で噛もうとしてもどうしても口がとどかないの意から。「噛む」は本来「噬む」と書いた。

【出】春秋左氏伝

【さんねん なみはちねん】 ぼつぼつ三年、波八年

一人前になるにはそれなりの年月・時間が必要だということ。

【説】日本画での絵の修業過程を言った言葉。ぼつぼつと点で苔（こけ）を描けるようになるのに三年、波を巧みに描けるようになるには八年の歳月がかかるの意から。

【類】首振り三年ころ八年

【ほとけつく たましいい】 仏作って魂入れず

物事の一番重要な部分が欠けていることのとたとえ。せっかく作り上げたのに、肝心な部分がおろそかになっていくことのとたとえ。

【説】仏像を作っても、魂を入れなければ仏像の役目をなさないの意から。

【類】画竜（がりよう）点睛（てんせい）を欠く

【ほとけ かお さんど】 仏の顔も三度

いかに仏様のように温和な人でも、何度も無礼なことをされれば怒り出すということ。

【説】慈悲深く心の広い仏でも、三度も顔を撫（な）でまわされれば、腹を立てるの意から。「地蔵の顔も三度」とも言う。

【ほねお ぞん もつ】 骨折り損のくたびれ儲け

労力ばかりかかって、なんの効果も得られず、ただ

くたびれただけであるということ。

【説】 儲けようとしたが、骨を折った分だけ損をし、残ったのは疲労感のみだったということ。

惚れた欲目

好きになつてしまうと、その相手を実際以上に良く見てしまうこと。欠点でさえ良く見えてしまうということ。

【類】 痘痕(あばた)も鬨(えくぼ)／屋烏(おくう)の愛

惚れて通えば千里も一里

恋しい相手に会いに行く時は、千里もある遠い道のりでも一里にしか感じられず、いっこうに苦にならないということ。

煩惱の犬は追えども去らず

つきまといつて離れない犬のように、煩惱は人の心から離れ難いことのとたとえ。

時かぬ種は生えぬ

原因がなければ結果は生じないということ。努力をしないで好結果だけを得ようとしてもだめだということ。

【説】 種を時かなければなにも生えてはこないの意から。

曲がらねば世は渡られぬ

正直一点張りや道理にかなった正しいことだけでは世の中をうまく渡つてはいけない。時には、自分の意を曲げてでも世間に同調する必要があるということ。

【類】 人と屏風(びょうぶ)は直(す)ぐには立たぬ／水清ければ魚棲(す)まず

枕を高くして寝る

安心してぐっすり眠る。また、心配事がなにもない状態のたとえ。

【説】敵が襲ってくる心配がないので、枕を高くして眠るの意から。「枕を高くして眠る」とも言う。

【出】史記

負けるが勝ちまか

人ととことん争うことをせず、時には負けてやって相手に勝ちを譲っておいたほうが、結果的には有利になり、後々良い結果になって返ってくるが多量ということ。

【類】逃げるが勝ち

松かさより年かさまつとし

年上の人が積んだ長年の経験やそこから生まれた知恵は役に立つから尊ぶべきだということ。

【説】「年かさ」と「松かさ」の語呂合わせ。

【類】亀の甲より年の劫(いひ)

待つ間が花ままはな

物事はあれこれ想像して、期待しながら待っている間が一番楽しいということ。

【説】「花」は最もよい時期の意。「待つが花」とも言う。

待つ身より待たる身まみ

待たせるつもりなどないのにやむを得ず待たせてしまう場合、待っている人も辛いだろうが、待たせているほうも心苦しくて辛いということ。

待てば海路の日和ありまかいろひより

今はうまくいかない物事もじっと待っていれば、そのうちにチャンスがきつと巡ってくるはずだ。だから、あせらず気長に待てということ。

【説】「海路の日和」は航海によい穏やかな天候のこと。海も今は荒れているが、待っていれば必ず航海に適したよい日が出てくるということ。「待てば甘露の日和あり」

の転じた語といわれる。「甘露」は中国の伝説で天が降らせるという甘い露のことで、日照りを堪えていれば、甘露のような恵みの雨が降るの意。

【類】 果報は寝て待て

まないた かい

俎板の鯉

他人の意のままになるより、他にどうしようもない状態のたとえ。

【説】 俎板の上のせられ、どう料理されても仕方のない状態にある鯉の意から。「俎板の魚(うお)」「俎上(そじょう)の魚」とも言う。

まゆ つば つ

眉に唾を付ける

嘘ではないかと疑う。だまされないように用心する。

【説】 狐(きつね)や狸(たぬき)に化かされないためには眉に唾を付けるとよいという俗信から。「眉唾」はだまされないよう用心すること。また「眉唾物」はいかがわしくて信用できないものの意。

まる たまご き しかく

丸い卵も切りようで四角

物事は同じことを言っても、話の仕方ひとつで円満にいくこともあるし、角が立つこともあるというたとえ。

【説】 丸い形をした卵でも、切り方によっては四角になるという意から。「ものもいいうで角が立つ」と後に続けても言う。

まる ひつがし ひんげん

丸くとも一角あれや人心

性格が温厚で柔和であることはよいことだが、それだけではお人好しととられがちである。時には主体性を保つためにも、自分の意地を通す強い面、つまり、少しは角があったほうがよいということ。

【説】 「あまりまろきは転び安きぞ」と後に続けても言う。「一角」は性格がちよつと角立っていること。

ま わた くび し

真綿で首を締める

時間をかけてじわじわといじめたり、遠回しに痛いところをついたりすることのたとえ。

【説】「真綿」は屠鹵（くずまゆ）を引き伸ばして綿のようにしたもの。やわらかい真綿で首を絞めるのは時間がかかり、苦しむ時間が余計長くかかることから。「締める」は「絞める」とも書く。

真綿に針を包む

見た目は柔和そうに見えるが、心の内には敵意を抱いていることのたとえ。人を傷つけようとする心や意地の悪さを隠して、うわべは人にやさしく親切に接すること。

【説】やわらかな真綿の中に鋭い針を包み隠しておいて、ちくりと相手を刺すことから。「綿に針を包む」とも言う。

み

み

身から出た錆

自分自身の犯した過ちが原因で不幸な目にあうことのたとえ。自分が悪いことをしたことの報いとしてわざわいを受け苦しむたとえ。

【説】刀身自体から生じて刀身を腐らせる錆の意から。刀身の「身」と自分自身の「身」とをかけて言ったもの。

見ざる聞かざる言わざる

人の欠点やあやまち、また自分にとって都合の悪いことは、見ない、聞かない、言わないようにするということ。

【説】目・耳・口をそれぞれ両手でふさいだ三匹の猿で知られる「三猿（さんえん）」にかけたもの。「見猿、聞か猿、言わ猿」とも当て、「…ない」の意の「…ざる」と「猿」とをかけた言葉。

水清ければ魚棲まず

人もあまりに清廉潔白・品行方正すぎると、かえって人から敬遠され、孤立してしまふというたとえ。

【説】水があまりに澄んでいると、魚は隠れる場所も、えさもないのでそこには棲(す)まないの意から。

【出】孔子家語(こうしけご)

水の低きに就くが如し

物事の成り行きとして、自然にそうなるというたとえ。徳のある君主に民が自然になびくことのたとえ。

【説】水が低いほうへ流れるようなものだということ。

【出】孟子(もうし)

水は方円の器に随う

人の性質・傾向などは、まわりの環境や友人によって、良くも悪くもなるということのたとえ。

【説】「方」は四角形、「円」は円形。水は入れ物の形に順応してどんな形にもなるという意から。

【出】韓非子(かんびし) 【類】朱に交われば赤くなる／

善悪は友による

見ての極楽、住んでの地獄

端から眺めているのと、実際に経験するのではあまりに大きな違いがあることのたとえ。

【説】見ていると極楽に見えるが、実際にそこに住んでみるとまるで地獄だという意から。「見ては極楽住んでは地獄」とも言っ。

源清ければ流れ清し

大本(おおもと)が正しければ、その末端もまた正しくなるというたとえ。また、上に立つ者が汚れなく、正しく生きていけば、下の者も自然に正しく生きるということのたとえ。

【説】川は源流が清く澄んでいけば、下流の水も自然に清らかになるの意から。

【出】荀子(じゅんし)

実るほど頭の下がる稲穂かな

人間は学問や徳が深まると、おのずと謙虚になってくるということ。

【説】稲穂は身が熟すと重くなつて穂先が垂れ下がつてくる、頭が下がってくることから。「実る稲田は頭を垂れる」とも言う。

見るは法楽

いろいろなものを見るのは楽しみだということ。また、見て楽しむのは無料だから大いに見ていけということ。

【説】「法楽」は供養のために仏前で奏する音楽や経のこと。転じて、慰み・楽しみみの意。

身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

物事は、我が身を犠牲にする覚悟があつてこそはじめて、成し遂げることができるということ。

【説】溺れかけた時、思いきつて体を水にゆだねてしまえば、体が浮いて浅瀬に立つこともあるの意から。窮地に陥った時、自分の命を捨てたつもりになって思いきつてやれば、活路を見いだすことができるということ。

む

むいか あやめ とおか きく 六日の菖蒲、十日の菊

時期に遅れてしまい、役に立たなくなつてしまふことのとたとえ。

【説】五月六日の菖蒲では、五月五日の端午（たんご）の節句に間に合わず、九月十日の菊では九月九日の重陽（ちようよう）の節句に遅れてしまい役に立たないことから。「十日の菊六日の菖蒲」とも言う。

【類】夏炉冬扇（かろうとうせん）

昔千里も今一里

むかしせんり いまいちり

若い頃すばらしい能力を発揮して活躍した人も、年をとれば並の人以下になってしまふというたとえ。

【説】昔は千里を駆け抜けることができた馬も、老いれば一里しか行くことができないの意から。

【類】麒麟(きりん)も老いては驚馬(どば)に劣る

昔取った杵柄

むかしと きねづか

かつて修練した能力。年とってもなお衰えない技能や腕前。腕に覚えがあり、自信があるという意味で言う。

【説】「杵柄」は杵の柄(え)で、昔、杵を巧みに操ったことがあるの意から。

娘一人に婿八人

むすめひとり むこはちにん

一人の娘に、婿になりたいと希望する者が八人もいること。一つしかないものに対して、欲しがる者がたくさんいることのたとえ。

無明の酒に酔う

むみょう さけ よ

煩惱にとらわれて悟ることができず、思い惑うたとえ。人の仏心をくもらせる無明を、飲むと人の心を迷わせる酒にたとえた言葉。

【説】「無明」は仏教用語で人生や事物の真相が明らかでないこと。

無用の長物

むよう ちやうぶつ

あつてもなんの役にも立たず、邪魔であるもののとえ。

【説】「長物」は長すぎて役に立たないもの。

無理が通れば道理引っ込む

むりとお どりょうひっこむ

筋が通らないことでも、一度世の中で通用してしまえば、それが正しいことになってしまい、筋の通った道理は行われなくなるといふこと。

【類】勝てば官軍負ければ賊軍／無理も通れば道理になる

名所に見所なし

景勝の地として名高い場所の多くは、案外たいしたことではなく、実際に訪ねてみるとがっかりすることが多いものである。名声は必ずしも実を伴っていないというたとえ。

【類】名物に旨（うま）い物なし

名人は人を誇らず

名人ともなれば、他の人の未熟さや短所をとがめだてするようないしはしないということ。

名物に旨い物なし

名物として名の通っているものは、実際に食べてみるとうまくないものが多い。名は必ずしも実を伴わ

ないということ。

【類】名所に見所なし

目から鼻へ抜ける

非常に賢くて、物事の理解がすばやいこと。また、手抜かりのないさまのたとえ。

目高も魚のうち

仲間内では取るに足らない者でも、同じ仲間には違いないというたとえ。

【説】めだかのような小魚でも魚には違いがないという意味から。

【類】蝙蝠（こうもり）も鳥のうち

目で目は見えぬ

他人のことはよくわかっていても、自分のことはわかりにくいというたとえ。

目には青葉、山時鳥、初鯉

初夏の代表的な風物を詠んだ句。

【説】江戸時代の俳人・山口素堂の句から。

目の上の瘤

自分より地位や実力が上で、目障りで邪魔に感じる人のたとえ。

【説】目の上にある瘤はうつうつしく気になることから。「目の上のたん瘤」とも言う。

目の寄る所へは玉も寄る

似かよった者が自然に寄り集まることのたとえ。また、同じようなことが続いて起こることのたとえ。

【説】目が動けば、それにつれて瞳（ひとみ）も一緒に動くの意から。

【類】類を以（もつ）て集まる／類は友を呼ぶ／同気相求む

目は口ほどに物を言う

なにも言わなくても、目は口で言うのと同じくらい、気持ち手を相手に伝えることができるということ。また、言葉ではごまかしていても、目を見れば真偽のほどはわかってしまうということ。

目は心の鏡

目を見れば、その人の心が正しいか正しくないか、また、言っていることが嘘か本当かが、よくわかるということ。

【説】目はその人の内心を映し出す鏡であるの意から。

【出】孟子（もうし）

目病み女に風邪ひき男

目の病気にかかった女性は、そのうるんだ目が色っぽく、風邪をひいた男性はのどに白い布を巻いた様子が小粋に見えて、どちらも魅力的だということ。

餅は餅屋^{もちもちや}

何事においてもそれぞれ専門家がいて、その専門家に任せれば間違いないということ。

【説】同じ餅をついてもやはりプロの餅屋がついたものが一番つまいの意から。

【類】芸は道によって賢し／海の事は漁師に問え

沐猴にして冠す^{もいじりかん}

うわべだけを着飾るあさはかな者のこと。教養のない愚かな者が表面だけを飾るたとえ。

【説】「沐猴」は猿のこと。あたかも猿が冠（かんむり）をかぶって気取っているようなものだということから。

【出】史記

持ったが病^{もやまい}

持たなければそれで済んだのに、なまじ持ったばかりに、それにかかわる面倒なことに悩まされるといったとえ。また、生まれつきの病気や感心しない性格などはどうにも直しようがないということ。

【類】匹夫（ひつぷ）罪なし壁（たま）を懐（いだ）いて罪あり

本木に勝る末木なし^{もときませうらぎ}

最初にあつたもののほうが、その後に取り替えたものより、結局は優れていることが多いということ。特に夫婦関係について言う。

【説】「本木」は木の幹や根元、「末木」は枝のこと。本木より優れた末木はないの意から。

物言う花^{ものいはな}

美人のたとえ。

【説】言葉を話す美しい花の意味。

【類】解語（かいご）の花

【ものい】
くちびるさむ あき かせ
物言えば 唇寒し秋の風

人の悪口など言わなくてもよい。余計なことを言ったりすると、思わぬ災いを招くことになるから、注意せよという戒め。

【説】江戸時代の俳人・松尾芭蕉（ばしょう）の句から。

【類】口は禍（わざわい）の門

【もの】
かげ
物がなければ影ささず

原因がなければ、結果は起こらないというたとえ。

【説】もとなる物がなければ影はできないの意から。

【類】時（ま）かぬ種は生えぬ／火のない所に煙は立たぬ

【もの】
じせつ
物には時節

物事にはすべてそれにふさわしい時節がある。その時節を逃したり、まだそこまで達していないのに無

理をしたのでは成功しないということ。

【説】「時節」はある事をするのにちょうど良い機会のこと。「事は時節」とも言う。

【もの】
そうだん
物は相談

困った時には、人に相談すればなにかしら良い解決策が出てくるかもしれない。まずは相談してみようということ。転じて、人に物事を依頼する時の前置きの言葉になっている。

【類】膝（ひざ）とも談合

【もの】
ため
物は試し

何事もやってみないとわからないものだから、とにかくまず試みてみるということ。

【もの】
い
かど た
物も言いようで角が立つ

同じ物事でも、言い方一つで相手の心を和らげたり、また逆に角が立つことがあるということ。

【説】「丸い卵も切りようで四角。物も言いようで角が立つ」と続けても言つ。

桃栗三年、柿八年

芽が出てから実を結ぶまで、桃と栗は三年、柿は八年かかるということ。転じて辛抱強くあれということ。

【説】このあとに「梅は酸(す)いとて十三年」「柚(ゆず)は九年の花盛り」「枇杷(びわ)は九年でなりかねる」などという言葉をつなげても言つ。

諸刃の剣

使い方によってはすばらしい力を発揮するが、同時に、非常に大きな危険を招く恐れもあるものたえ。

【説】画面に刃のある剣は、自分の身にも傷をつけやすいことから。「諸刃」は「両刃」とも書く。

門前、市を成す

名声や権勢を慕って訪れる客が非常に多いことのため

とえ。

【説】門の前に人がたくさん集まって、まるで市場のようににぎやかであるの意から。

【対】門前雀羅(じゃくら)を張る

門前雀羅を張る

門前に網を張って雀を捕らえることができるほど、訪れる人もなくさびれている様子。

【対】門前、市を成す

門前の小僧、習わぬ経を読む

毎日のように接したりしているものに感化されたり、影響を受けることのため。

【説】寺の門前に住む子供はいつも僧侶たちの読経を耳にしているため、いつの間にか聞き覚えて、習ったこともない経の文句も覚えてしまうという意から。

【類】勸学院の雀(すずめ)は蒙求(もうぎゅう)を囀(さえず)る

役者に年なしやくしや とし

円熟の役者は年齢による衰えを感じないということ。役者は実際の年齢より若い役でも巧みに演じることから、年齢を重ねても衰えを感じさせず、若々しいという意味。

【類】芸人に年なし

焼跡の釘拾いやけあと くわひろ

火事のような大きな損失の後で、釘を拾うようにわずかな回収を試みることに。大きな散財の後に、小さなことにもけちけちするさまのたとえ。

焼け石に水や いし みず

焼けた熱い石に少しばかりの水をかけてもなんの利

き目もないことから、わずかな援助や努力では、まるで効果が期待できないというたとえ。

焼け木杭に火がつくや ほつくい ひ

いったん消えかけた燃えさしがひよんなことからまた燃え出すように、男女の仲は、別れた関係がちよっとしたきっかけで、またもとに戻りやすいということ。

夜食過ぎての牡丹餅やしよくす ぼたもち

夜の食事が終わって満腹の時に、牡丹餅をもらってもあまりうれしくないことから、時期を逸して、価値やありがたみが薄れること。

柳に風やなぎ かせ

柳の枝が強い風でも逆らわずなびくように、相手に合わせて受け流し、穏やかに上手にあしらうこと。

柳に雪折れなしやなぎ ゆきお

柳の枝は、雪が積もってもたわんで折れずに払い落とすので、折れることはない。一見、弱そうに見えても、しなやかなほうが、堅いものより強く、したたかであることのたとえ。

【類】柔よく剛を制す

やなぎ した

柳の下にいつも泥鰌はいない

やなぎ した

偶然運良くいいことがあったとしても、同じ方法で、同じように何度もいいことが続くことはないという意。

【説】柳の下で一度、泥鰌を捕まえたからといって、いつもそこに泥鰌がいると思つのは、間違ひというたとえ。

野に遺賢なし

優れた人物は国に登用され民間に残っていないこと。また、賢者によってよい政治が行われていることのとえ。

【説】「野」は民間、「遺賢」は埋もれている賢者の意味。

【出】書経

や

やはり野に置け蓮華草

蓮華草は、野原に咲いている自然のままがいちばん美しいのであって、摘んでしまえば意味がないということ。同様に、物には相応しい場所があるように、人にもその人なりの相応しい環境があるというたとえ。

【説】播磨の瓢水という俳人が遊女を身請けしようとした友人をいさめて作った俳句「手に取るなやはり野に置け蓮華草」からと来たたとえられている。

藪から棒

藪の中から突然棒が突き出てくるように、唐突に予想もしていないことが起こる様子。

【類】青天の霹靂（へきれき）／寝耳に水

藪をつついて蛇を出す

余計なことをして、かえって災難を招くことのたとえ。略して「藪蛇」。

病、膏肓に入るやまい じゅうりょう いる

治る見込みのない病にかかるという意味。転じて、道楽や趣味にのめり込み、どうにも手がつけられなくなってしまうことのたとえ。

【説】「膏」と「肓」は、薬も鍼（きゅう）も届かない、治療できない内臓の最深部の名前。

【出】春秋左氏伝

病は気からやまい き

病気は気の持ちようで、良くも悪くもなるということ。

山高きが故に貴からずやまたか ゆえ たつと

人の値打ちは外見の立派さではなく、中身が大切だということのたとえ。

【説】「樹有るを以て貴しと為す。人肥えたるが故に貴からず、智有るを以て貴しと為す」と続く。

【出】実語教

山に躓かずして埴に躓くやま つまず ちつ つまず

大きな事柄には慎重に取り組むので失敗は少ないが、小さな事柄にはつい油断をして、失敗することのたとえ。

【説】「埴」は蟻塚のこと。

【出】韓非子

山の芋、鰻になるやま いも うなぎ

現実には起こり得ないような変化を遂げることのたとえ。また、普通の人が急に出世したり、大金持ちになったりすること。

【類】蕪（かぶ）は鶉（うずら）となり、山芋は鰻となる

【反】山の芋鰻とならず

闇夜に烏、雪に鷺やみよ からす ゆき さぎ

まわりとよく似ていて、はっきりとわからないことのたとえ。

【類】闇の夜の烏（からす） 月の夜の白鷺（しらさぎ）

やみよ ちみづちん

闇夜の提灯

心細い時に頼りになるものに出会うことのとたとえ。

【類】渡りに船／地獄で仏

病む目より見る目

病気で臥せっている本人よりも、看病や世話をして
いる人のほうがつらいということ。「病む身より見る
目」とも言う。

ゆ

有終の美を飾る

物事を最後まで成し遂げて、良い結果を残すこと。

【説】有終は、終わりを全うするという意味。

ゆうしゅう せんと じやくそく

勇将の下に弱卒なし

指導者が優れた人物であれば、その部下にも頼りな
いものはいないということ。

【説】勇ましく、強い將軍の下には、弱々しい兵士がいな
いという意味。

ゆうや かまと

夕焼けに鎌を研げ

夕焼けの次の日は晴れになるので、鎌を研いで明日
の仕事の準備をしておきなさいということ。

ゆうらい しゅうたいみ か おほな

幽霊の正体見たり枯れ尾花

恐怖心で見ると、なんでもないものまで恐いものに
見えることのとたとえ。

【説】「尾花」はすすきのこと。

ゆう が だちん

行き掛けの駄賃

ゆ

もののついでに別のことをすること。また、それで、利益を得ること。

【説】昔、馬子が荷物をとりに行く時に、ついでに別の荷物を運んでお金を稼いだことから。

【類】朝駆けの駄賃

ゆき だいまよう かえ こじき 行き大名の帰り乞食

初めにお金を使い、後になってお金がなくなること。お金の使い方計画性のないこと。

【説】旅行で最初に豪勢にお金を使ってしまい、帰りにはお金がなくて困る様子。

ゆき ほうねん しるし 雪は豊年の瑞

雪の多い年は、豊作になることが多いということ。

ゆき じぎ みず 湯の辞宜は水になる

遠慮するのも時と場合を考えてすべきだということ。

【説】辞宜は、遠慮すること。お風呂を遠慮しているうち

にお湯が水になってしまふという意味。

ゆめ さかゆめ 夢は逆夢

夢で見たことは、現実では逆の形となって現れるということ。

【説】悪い夢を見た時に言う、慰めの言葉。

ゆ わ みず 湯を沸かして水にする

せつかくの苦労や努力を無駄にになってしまうこと。

【説】お湯を沸かしたのに、使つことなく水になってしまうという意味。

よ

よい ば あさねぼう 宵っ張りの朝寝坊

夜更かしばかりして、朝起きられないこと。また、そういう人。

酔いどれ怪我せず

酔っ払いがふらふらしていても、大きな怪我などしないように、無心の状態の時には、大きな失敗がないということ。

用ある時の地藏顔、用なき時の閻魔顔

人にものを頼む時は、お地藏様のようなにこにこ顔で、用のない時は無愛想な顔をしていること。

欲の熊鷹、股裂くる

あまりに欲が深いと、結局自分の身を減らすということのたとえ。

【説】熊鷹が二頭の猪を両足で同時に捕まえて離さなかつたため、猪が左右に逃げた時に股が裂けてしまったという昔話から。

預言者、郷里に容れられず

先見の明がある優れた人物も、身近な人々からは尊敬されにくい、理解してもらえないということ。

【出】新約聖書

葦の髄から天井を覗く

狭い知識や浅い経験で、大きな問題を判断したり、全体的なことを決めつけてしまうことのたとえ。

【説】葦の髄は、葦の茎の細い穴。細い穴から天井の一部を見て、天井すべてを見たようなつもりになっている様子。

世の中は九分が十分

とかく世の中は自分の思うとおりにいかないもの。九分通り実現したならば、それで十分だという意味。

世の中は三日見ぬ間の桜かな

人の世の移り変わりは目まぐるしく、ちょっと見ぬ間に様変わりしているということのたとえ。

【説】桜の花は、三日も見ないでいるうちに、満開になっていたりと、散ってしまったたりすることから。

夜道よみちに日は暮ひれぬく

いったん、日が暮れてしまったらあわてて帰ることはない。すでに夜道になっているのだから日暮れの心配をしてあせることはないということ。

夜目よめ、遠目とおめ、笠の内かさうち

女性は、夜に見る時、遠くから見る時、笠からちらりと見る時が、実物より美しく見えるということ。

寄よらば大樹たいじゆの陰かげ

庇護を受けたり、頼りにするのなら、大きく力のある者の下についたほうがなにかと得だし安心だということのたとえ。

【説】雨宿りや強い日ざしを避けるには、小さな木より、大きくたくさん葉の茂った木の下のほうがよいということから。

弱よわり目めに祟たたり目め

困っている時、弱りきっている時に、追い打ちをかけるように災難が重なって起きること。

【説】弱っている時に祟りまで受けるという意味。

5

来年らいねんの事ことを言いえば鬼おにが笑わらう

明日のことさえ不確かなのに、来年のことなどわかるはずもない。先々のことをあれこれと考えてみても結局あてにならないし、わからないということ。

楽あれば苦あり、苦あれば楽あり

楽しさの後には苦しみが、苦しさの後には楽しみがある。苦しい時でも諦めずにがんばれば良いことがある、楽しいだけでは後で苦勞することになるといふこと。

【類】 楽は苦の種、苦は楽の種

楽は苦の種、苦は楽の種

楽は苦から生まれるものであり、苦は楽から生まれるものという意味。

【類】 楽あれば苦あり、苦あれば楽あり

落花流水の情

散る花とそれを浮かべて流れる水のように、男女が自然に情を寄せ合うことのとたとえ。

【説】 落ちる花は流れる水に身をまかせ、流れる水は落ちた花を浮かべて流れてゆきたいという気持ちを表した言葉。

り

李下に冠を正さず

少しでも疑われるようなまぎらわしい行為はすべきではないということ。

【類】 瓜田に履を納（い）れず、李下に冠を正さず

理屈と膏藥はどいへでもつく

体のどこにでもつけられる膏藥と同じように、どんなことにも理屈をつけようと思えばそれなりの理屈はつけられるということ。

理に勝つて非に落ちる

理屈の上では正しく、勝つてはいるが、実際は不利な立場に立たされていること。「理に勝つて非に負ける」とも言う。

りゅうび さかだ
柳眉を逆立てる

美しい女性が眉をつり上げひどく怒る様子。

【説】「柳眉」は、柳の葉のように細く美しい眉のこと。

りゅうのこころ
凌雲の志

世俗を外れた高い志。また、立身出世をしようとす
る志のこと。

【説】「凌雲」は、雲を凌ぐという意味。

【出】漢書

りょうげん ひ
燎原の火

手のほどこしようなないくらいに激しい勢いで、物
事が広がっていくことのとたとえ。

【説】「燎原」は、野原を焼くこと。

りょうて はな
両手に花

良い物を二つ同時に手に入れること。一人の男性の

そばに二人の女性がいる場合にも使う。

りょうほうき げち
両方聞いて下知をなせ

争い事は、双方の言い分をよく聞いてから、公平に
判断しなければならぬということ。

【説】「下知」は、昔の判決のこと。

りょうやく くち にか
良薬は口に苦し

効き目のある薬ほど、苦くて飲みにくいもの。人の
意見や忠告も素直に受け入れにくいが自分のため
になるといふことのとたとえ。

【類】忠言耳に逆らう 【出】韓非子

りょうゆう なら た
両雄、並び立たず

抜きん出た力量を持つ者同士は、どちらかが倒れる
まで徹底的に戦い、競い合う。双方が共存して並び
立つことはないという意味。

【出】史記

る

類は友を呼ぶ

性格の似た者や気の合う者同士は自然に集まり、仲間を作るということ。

【類】類を以て集まる

瑠璃も玻璃も照らせば光る

優秀な人物は、どこにいても際立って見えるということ。また、そういう人物は、機会を与えれば、その実力をいかんなく発揮するということのたとえ。

【説】「瑠璃」は紺色の宝石、「玻璃」は水晶のこと。どちらも照らせばひととき美しく輝くことから。

れ

礼勝てば即ち離る

礼儀にこだわり作法を重んじてばかりいると、人との関係も堅苦しくなり、お互いの心が離れていくということ。

【出】礼記

礼も過ぎれば無礼となる

あまりに度を越した、必要以上の礼儀は、かえって相手に失礼になるということ。

歴史は繰り返す

過去に起きた歴史上の事柄は、歴史を経て、再び同じような経過をたどり繰り返されるということ。

連木で腹を切る

できないこと。とうてい不可能なことのたとえ。

【説】「連木」はすりこぎ。「杓子で腹を切る」とも言う。

る・れ

勞多くして功少なしろうおほく こうすく

苦勞ばかりが多くて、見返りの少ないこと。

【類】「勞あつて功なし」とも言う。

籠鳥雲を恋つろうちゆうくも

自由な境遇に憧れること。また、離れた故郷を恋しく思うことのたとえ。

【説】籠（かご）の中の鳥が空を漂う雲に憧れるという意。

老馬の智ろうば

経験豊富で知識もあり、物事の判断が適切であること。

【説】中国・斉（せい）の桓公（かんこう）が道に迷った時、老馬を離してその後についていき、無事帰途についたという故事から。

ローマは一日にして成らいちにちずな

大事業は、短期間でできるものではなく、長い年月と大きな労力があつて成し遂げられるものだけのこと。

魯魚の誤りろぎよ あやま

魯と魚をうっかり勘違いして書き誤るように、文字が似ていて間違えることのたとえ。

六十の手習ろくじゅう てなり

年をとつてから習い事や稽古事、学問を始めること。

【説】「手習い」とは字を習つこと。

論語読みの論語知らずろんごよ ろんごし

物事の知識や理屈は知っているが、実際の行動が少しも伴わない人のこと。

【説】「論語」を読むことは得意のだが、その内容が何

一(し)身(み)に(こ)う(ご)う(ご)な(ご)う(ご)い(ご)い(ご)。

論より証拠

具体的な証拠、実物のほうが、数多くの議論を重ねるよりも明確で説得力があるということ。

わ

若い時の苦勞は買つてもせよ

若い時分の苦勞というものは、自分を鍛え成長させるとともに、将来、貴重な経験となつて必ず役に立つものなので、自ら求めてでもすべきだということ。

我が寺の仏尊し

自分のものはどんなものでも良く見え、良く思える

ものだということ。

【説】自分のお寺の仏は、何よりも尊いと思うことから。「我が仏尊し」とも言う。

我が身を抓つて人の痛さを知れ

自ら苦痛を経験し、他人の苦しさや痛みを知ること、人を思いやることができるということ。

我が物と思えば軽し笠の雪

笠に降り積もる雪でも、自分の物だと思えば軽く感じられる。どんなに苦しいことでも、自分のためになることだと考えれば、苦にならないということ。

【説】江戸時代の俳人・宝井其角(たからいきかく)の句「我が雪と思えば軽し笠のうへ」から。

禍を転じて福となす

降りかかる禍を上手に利用して、幸福のきっかけとすること。

わ

和して同ぜずわ どう

人とは争わず調和を重んじるが、自分の信念はしっかりと持っていて、安易に同調したり、迎合したりしないこと。

渡りに船わた ふね

なにかをしようとしている時に、思いがけない助けがあったり、都合の良いことが起きたりすること。

【説】川を渡ろうとする時に、ちょうどそこに船があるという意味。

渡る世間に鬼はないわた せけん おに

世渡りはなにかとつらいものだが、世の中には鬼のように冷たい人ばかりではなく、心根のやさしい親切な人もいるということのたとえ。

笑う門には福来るわら かど ふくきた

家族みんなが仲良く暮らし、笑い声の絶えないような明るい家庭には、自然に幸せが訪れるという意味。

【説】「門」は家、またその門のこと。

破れ鍋に綴じ蓋わ なべ とぶた

誰にでもその人に似合う相手がいるということのたとえ。似たもの夫婦や男女の仲に使う場合が多い。

【説】破れた鍋には、壊れた部分を修繕した蓋がびったりと合つたという意味。

和を以て貴しとなすわ もつ とつと

この世の中でもっとも大切なことは、人と仲良くすること、人の和を大事にすることだということ。

【説】『礼記』の中にある言葉だが、聖徳太子の定めた十七条憲法第一条のほうが有名。

主な出典・略解

本書の出典書名のうち、主なもののみ掲載

晏子春秋

中国・春秋時代、斉の景公に仕えた宰相・晏嬰（あんえい）の言行をまとめた書。『晏子』とも言う。

易経

吉凶禍福を占うのに用いた古代の書。『周易（しゅうえき）』、『易』とも言う。五経の一つ。

淮南子

前漢の淮南王劉安（わいなんおうりゅうあん）（漢の高祖の孫）の編著による哲学書。古今の治乱・興亡・吉凶・禍福・世上の風説などを集めた百科全書的な書。

漢書

後漢の班固（はんこ）の著。『史記』にならない、前漢

一代のことを記した歴史書。『前漢書』とも言う。二十四史の一つ。

韓非子

戦国時代の思想家・韓非の思想を録した書。法家の代表的書物で法治主義の思想を展開する。『孟子』『莊子』と合わせ、古文の三大文章と称される。

後漢書

後漢一代の歴史を記した書。「本紀」と「列伝」は南朝宋の范曄（はんよう）、「志」は晋の司馬彪（しばひよう）の著。二十四史の一つ。

史記

漢の武帝までの三千余年間の歴史を記した書。前漢の司馬遷（しばせん）の著。後の正史の典型となった中国の代表的な史書。二十四史の一つ。

詩経

中国最古の詩集。周のはじめから春秋の中頃までの詩を集めている。儒家の経典（けいてん）である五経の一つ。

荀子 じゆんし

戦国時代の趙の思想家・荀況（じゆんききやう）の著。孟子（もうし）の性善説に対し、性悪説を主張し、礼を尊び教育を重んじた。

春秋左氏伝 しゅうしゅうせいけん

春秋時代の魯の歴史を記した『春秋』の注釈書。五経の一つ。略して『左氏伝』『左伝（さでん）』とも言う。

書経 しよきやう

五経の一つ。虞（ぐ）・夏（か）・殷（いん）・周の政道について記した書。

北夢瑣言 ほくむさげん

唐・五代・宋の逸事を記したもの。北宋の孫光憲（そ

んこうけん）の著。『ほくぼうさげん』とも言う。

礼記 らいき

主に周代末から秦漢時代の儒者の礼に関する理論と実際を集めた書。五経の一つ。

列子 れつし

戦国時代の学者・列禦寇（れつぎよこう）（列子）の著といわれる道家の思想書。

老子 らうし

戦国時代の道家の祖・老子が著したとされる書。無為自然を述べた道家の経典（けいてん）で、「道教」と「徳経」との上下二編から成る。『老子道德経』とも言う。

論語 ろんご

儒家の祖、孔子と門人たちの言行を記録した書。四書の一つ。孔子の死後、門人たちが編集したとされる。

フー ライクス ノット ヒズ ビズィネス ヒズ ビズィネス ライクス
★ Who likes not his business, his business likes
ノット ヒム
not him.

(自分の仕事を好まない者は、仕事のほうもその人を好まない)
⇒好きこそ物の上手なれ

ウィズダム イズ ベター ザン リッチズ
★ Wisdom is better than riches.

(知恵は富にまさる) ⇒知恵は万代の宝

ワイズ メン チェインジ ゼア マインド フールズ ネヴァー
★ Wise men change their mind, fools never.

(賢者は決心を変えるが愚者は決して変えない) ⇒君子豹変す

ウィメン アー アズ ウエイヴァリング アズ ザ ウィンド
★ Women are as wavering as the wind.

(女性は風のように揺れ動く) ⇒女心と秋の空

Y

ユー アー カム オヴ ア ブラッド アンド ソーイズ ア プディング
★ You are come of a blood and so is a pudding.

(君はいい血筋の出だが「豚の血の多い」ソーセージもそうだ)
⇒家柄より芋幹<いもがら>

ユー キャンノット スイー ザ ウッド フォア トウリーズ
★ You cannot see the wood for trees.

(木のために森を見ることができない) ⇒木を見て森を見ない

ユー マスト テイク ザ ファット ウイズ ザ リーン
★ You must take the fat with the lean.

(赤身と一緒に脂身も受け取らなければならない)
⇒損せぬ人に儲けなし

ユー ウィル ネヴァー ビー ヤンガー
★ You will never be younger.

(今より若くなることはない) ⇒盛年重ねて来らず

ユウス ウィル ハヴ イッツ コース
★ Youth will have its course.

(青年期は自由に活動するものである) ⇒若気の至り

(一つの物がたくさんありすぎても役に立たない)

⇒過ぎたるはなお及ばざるがごとし

トウ ドッグズ ストライヴ フォア ア ボーン アンド ア サード ランズ
★ Two dogs strive for a bone, and a third runs
アウェイ ウイズイット
away with it.

(二匹の犬が骨を争い、第三の犬がその骨を持って逃げる)

⇒漁夫の利

V, W

ヴェンチャー ア スマール フィッシュトゥ キャッチ ア グレイト ワン
★ Venture a small fish to catch a great one.
(大魚を釣るために小魚を賭けよ) ⇒蝦<えび>で鯛を釣る

ヴァーチュウ イズ イッツ オウン リワード
★ Virtue is its own reward.
(徳行は自ら報いる) ⇒善を為すこと最も楽し

ウォールズ ハヴ イアーズ
★ Walls have ears.
(壁は耳を持っている) ⇒壁に耳あり

ウィ ラーン バイ ティーチング
★ We learn by teaching.
(人は教えることによって学ぶ) ⇒教うるは学ぶの半ば

ウェル ビガン イズ ハーフ ダン
★ Well begun is half done.
(始めが好調なら半分終わったようなもの) ⇒始め半分

ホウェア ゼア イズ ア ウィル ゼア イズ ア ウェイ
★ Where there is a will, there is a way.
(意志のあるところに道がある) ⇒精神一到何事か成らざらん

フー キャン ホールド ザット ウィル アウェイ
★ Who can hold that will away?
(去りたがっている者をだれが引き留め得ようか)
⇒去る者は追わず

フー キーブス カンパニィ ウィズ ザ ウルフ ウィル ラーン ホウル
★ Who keeps company with the wolf will learn howl.
(狼と付き合う者は吠えることを覚える)
⇒朱に交われれば赤くなる

ストライク ホワイル ジ アイアンイズ ホット
★ Strike while the iron is hot.
(鉄は熱いうちに打て) ⇒好機逸すべからず

サッチ キャプテン サッチ レティニュー
★ Such captain, such retinue.
(この隊長にしてこの従者) ⇒勇将の下に弱卒なし

T

テンペランス イズ ザ ベスト フィジィック
★ Temperance is the best physic.
(節制は最良の薬である) ⇒腹八分目に医者いらず

ゼア イズ ノウ アカウンティング フォー ティスト
★ There is no accounting for tastes.
(趣味を説明することはできない) ⇒藝<たで>食う虫も好き好き

ザ サード タイム ベイズ フォアオール
★ The third time pays for all.
(三度目がすべての埋め合わせをする) ⇒三度目の正直

ザ ヴォイス オヴ ザ ビーブル ザ ヴォイス オヴ ゴッド
★ The voice of the people, the voice of God.
(民の声は神の声) ⇒天に口なし人を以<もつ>て言わしむ

タイム アンド タイド ウェイト フォア ノウ マン
★ Time and tide wait for no man.
(時間と潮は人を待つことはない) ⇒歳月人を待たず

タイム フリーズ アウェイ ウィズアウト ディレイ
★ Time flees away without delay.
(時は猶予なく逃げ去る) ⇒光陰矢の如し

トゥ ホウィッスル サームズ トゥ ア デッド ホース
★ To whistle psalms to a dead horse.
(死んだ馬に賛美歌を歌って聞かせる) ⇒馬の耳に念仏

トゥー メニー クックス スポイル ザ ブロース
★ Too many cooks spoil the broth.
(料理人が多すぎるとスープができ損なう)
⇒船頭多くして船山へ上る

トゥー マッチ オヴ ワン シング イズ グッド フォア ナッシング
★ Too much of one thing is good for nothing.

プリヴェンション イズ ベター ザン キュア
★ Prevention is better than cure.
(予防は治療にまさる) ⇒ 転ばぬ先の杖

Q,R

クワイエットネス イズ ベスト
★ Quietness is best.
(静かにしていることがいちばんだ)
⇒ 雉<きじ>も鳴かずに打たれまい

リーズン ルールズ オール スィングス
★ Reason rules all things.
(道理は万物を支配する) ⇒ 道理に向かう刃なし

リペンタンス カムズ トゥー レイト
★ Repentance comes too late.
(後悔が来るのは遅すぎる) ⇒ 後悔先に立たず

リッチイズ ハヴ ウィングス
★ Riches have wings.
(富には翼がある) ⇒ 銭は足無くして走る

ランニング ウォーター イズ ベター ザン スタンディング
★ Running water is better than standing.
(流れる水は淀みよりよい) ⇒ 流水腐らず

S

セカンド ソーツ アー ベスト
★ Second thoughts are best.
(再考は最良の策) ⇒ 念には念を入れよ

シーイング イズ ビリーヴィング
★ Seeing is believing.
(見ることは信じることである) ⇒ 百聞は一見に如かず

スーナー ネイムド スーナー カム
★ Sooner named sooner come.
(名前を呼ばれるや否や現れる) ⇒ 噂をすれば影が差す

スペアー ザ ロッド アンド スポイル ザ チャイルド
★ Spare the rod and spoil the child.
(鞭<むち>を惜しむと、その子はだめになってしまう)
⇒ 可愛い子には旅をさせよ

(老人は二度目の子供である) ⇒六十の三つ子

ワン マン ノウ マン
★ One man no man.

(一人は誰でもない) ⇒衆力功あり

ワン ミスフォーチュン カムズ オン ザ ネック オヴ アナザー
★ One misfortune comes on the neck of another.

(不幸は別の不幸のすぐ後に続いてやって来る) ⇒泣き面に蜂

ワン マスト ドロー ザ ライン サムホエア
★ One must draw the line somewhere.

(どこかに一線を描さねばならない) ⇒和して同ぜず

ワン オヴ ジーズ デイズ イズ ナン オヴ ジーズ デイズ
★ One of these days is none of these days.

(「そのうちいつか」はいつの日でもない) ⇒紺屋<こうや>の明後日

ワン トゥデイ イズ ワース トゥー トゥモロウズ
★ One today is worth two tomorrows.

(今日の一日は明日以後の二日分の価値がある)

⇒明日の百より今日の五十

アウト オヴ サイト アウト オヴ マインド
★ Out of sight, out of mind.

(目に見えないものは忘れられる) ⇒去る者は日々に疎<うと>し

P

フィジシャン ヒール ザイセルフ
★ Physician, heal thyself.

(医師よ、自らを癒せ) ⇒医者の不養生

ポゼッション イズ ナイン ポインツ オヴ ザ ロー
★ Possession is nine points of the law.

(占有は九分の勝ち目) ⇒預かり物は半分の主

プラクティス メイクス パーフェクト
★ Practice makes perfect.

(練習が完全を生みだす) ⇒習うより慣れよ

プラクティス ホワット ユー プリーチ
★ Practice what you preach.

(あなたの説教することを実行しなさい)

⇒言うは易く行うは難し

ネームズ アンド ネイチャーズ ドゥ オフン アグリイ

- ★ Names and natures do often agree.
(名前と性質はしばしば一致する) ⇒名は体を現す

ネセシティ イズ ア ハード ウェポン

- ★ Necessity is a hard weapon.
(必要は頑丈な武器である) ⇒窮すれば通ず

ネヴァー トゥー オールドトゥー ラーン

- ★ Never too old to learn.
(学ぶのに年をとりすぎるといことは決してない)
⇒六十の手習い

ノウ マン キャン メイク ヒズ オウン ハップ

- ★ No man can make his own hap.
(いかなる者も自分の運は作れない) ⇒運は天にあり

ノウ リプライ イズ ベスト

- ★ No reply is best.
(弁解をしないのがいちばん) ⇒柳に風

ノウ ウイズダム トゥ サイレンス

- ★ No wisdom to silence.
(沈黙にまさる知恵はない) ⇒言わぬは言うにまさる

ノット ホウェア ワン イズ ブレッド バット ホウェア ヒー イズ フェド

- ★ Not where one is bred but where he is fed.
(生まれではなく育った所) ⇒氏より育ち

ナッシング コスト ソウ マッチ アズ ホワットイズ ギヴン アス

- ★ Nothing costs so much as what is given us.
(もらい物ほど高くつくものはない) ⇒ただより高いものは無い

ナッシング ライク ビーイング オン ザ セーフ サイド

- ★ Nothing like being on the safe side.
(安全な側にいるにこしたことはない) ⇒君子危うきに近寄らず

○

オールド エイジ タイアーズ ボウス ボディ アンド ソウル

- ★ Old age tires both body and soul.
(老齢のため心身はともに疲弊する) ⇒寄る年波には勝てぬ

オールド メン アー トワイズ チルドレン

- ★ Old men are twice children.

-
- ラヴ ユア ネイバー イエット ブル ノット ダウン ユア
★ Love your neighbour, yet pull not down your
ヘッジ
hedge.
(汝の隣人を愛せ、けれど垣根を取り払うな)
⇒親しき仲にも礼儀あり

M

- メイク ヘイスト スロウリィ
★ Make haste slowly.
(ゆっくり急げ) ⇒急がば回れ
- メイク ヘイ ホワイル ザ サン シャインズ
★ Make hay while the sun shines.
(日の照るうちに干し草を作れ) ⇒善は急げ
- マリッジ イズ ア ロタリィ
★ Marriage is a lottery.
(結婚はくじのようなものである) ⇒縁は異なるもの味なもの
- メジャー イズ メディスン
★ Measure is medicine.
(適量が薬) ⇒腹八分目に医者いらず
- マネー イズ ア グレイト トラヴェラー イン ザ ワールド
★ Money is a great traveler in the world.
(金は世界の旅行者である) ⇒金は天下の回り物
- モア プロフィット アンド レス アナー
★ More profit and less honor.
(より多くの利益とより少ない名誉) ⇒名を捨てて実を取る
- モア ザン イナッフ イズ トゥー マッチ
★ More than enough is too much.
(十分以上のものは多すぎる)
⇒過ぎたるはなお及ばざるがごとし
- モウズ メイ カム トゥ アーネスト
★ Mows may come to earnest.
(冗談が本当になることがある) ⇒瓢箪<ひょうたん>から駒が出る

N

キッチン フィジック イズ ザ ベスト フィジック

- ★ Kitchen physic is the best physic.
(台所の薬が最良の薬である) ⇒薬より養生

L

レイ アップ アゲインスト フォア レイニィ デイ

- ★ Lay up against for rainy day.
(雨の日に備えて蓄えよ) ⇒備えあれば患<うれ>いなし

ラーン ア トレイド フォア ザ タイム ウィル カム フウェン ユー

- ★ Learn a trade, for the time will come when you shall need it.
(技を習え、それを必要とする時がやって来るであろうから)
⇒芸は身を助ける

ライト サバー メイクス ロング ライフ

- ★ Light supper makes long life.
(軽い夕食は寿命を長くする) ⇒小食は長生きのしるし

ライク キュアーズ ライク

- ★ Like cures like.
(類が類を治療する) ⇒毒を以<もつ>て毒を制す

リトル アンド オーフンフィルズ ザ バース

- ★ Little and often fills the purse.
(少しずつでもひんばんに繰り返せば財布を満たす)
⇒塵も積もれば山となる

ルック ビフォア ユー リープ

- ★ Look before you leap.
(跳ぶ前に見よ) ⇒念には念を入れよ

ルッカーズオン スィー モスト オヴ ザ ゲーム

- ★ Lookers-on see most of the game.
(見物人はゲームがいちばんよく見える) ⇒傍目<おかめ>八目

ラヴ カヴァーズ メニィ インファーミティーズ

- ★ Love covers many infirmities.
(愛は多くの欠点をおおい隠す) ⇒あばたもえくぼ

ラヴ ミー リトル ラヴ ミー ロング

- ★ Love me little, love me long.
(少し愛して、長く愛して) ⇒愛は小出しにせよ

イン ワイン セア イズ トルウス

★ In wine there is truth.

(酒の中に真実がある) ⇒酒は本心を現す

イット アーリィ ブリックス ザット ウィル ビー ア ソーン

★ It early pricks that will be a thorn.

(茨<いばら>になる木は早くから刺す)

⇒梅檀<せんだん>は二葉より芳し

イット イズ グッド シェルタリング アンダー アン オールド ヘッジ

★ It is good sheltering under an old hedge.

(年を経た垣根の下で雨宿りするのはよい) ⇒寄らば大樹の陰

イット イズ ノウ ユーズ クライイング オウヴァースピルトミルク

★ It is no use crying over spilt milk.

(こぼれたミルクのことを嘆いても無駄である)

⇒覆水盆に返らず

イット イズ トゥー レイト トゥ グレイヴ フウエン ザ チャンス パスト

★ It is too late to grieve when the chance past.

(好機が去ってから嘆くのでは遅すぎる) ⇒好機逸すべからず

イット ネヴァー レインズ バット イット ポーズ

★ It never rains but it pours.

(降れば必ず土砂降り) ⇒一度ある事は二度ある

J, K

ジャック オヴ オール トレイズ アンド マスタァ オヴ ナン

★ Jack of all trades, and master of none.

(何でも屋はどれにも熟達しない) ⇒多芸は無芸

ケイル スベアズ ブレッド

★ Kail spares bread.

(野菜汁でパンを節約する) ⇒茶腹も一時

キープ ユア マウス シャット アンド ユア アイズ オープン

★ Keep your mouth shut and your eyes open.

(口は閉じ目は開けておけ) ⇒耳は大なるべく口は小なるべし

キープ ユア ショップ アンド ユア ショップ ウィル キープ ズイー

★ Keep your shop, and your shop will keep thee.

(汝の店を守れ、そうすれば、汝の店が汝を守ろう)

⇒商い三年

ハーヴェスト フォロウズ シードタイム

★ Harvest follows seed-time.

(収穫は種まきの後にやって来る) ⇒ 蒔<ま>かぬ種は生えぬ

ヒー ザット キャン ステイ オブテインズ

★ He that can stay obtains.

(じっとしていることのできる人が獲得する)

⇒ 待てば海路の日和あり

ヒー ザット ノウズ ナッシング ダウト ナッシング

★ He that knows nothing doubts nothing.

(何も知らない人は何も疑わない) ⇒ 知らぬが仏

ヒー ザット リヴズ ノット ウェル ワン イヤー ソロウズ セヴン

★ He that lives not well one year sorrows seven

アフター

after.

(一年いい加減な暮らしをするとその後七年悔やむ)

⇒ 一時の解怠<けだい>は一生の解怠

ヒー ザット ステイズ イン ザ ヴァリィ シャル ネヴァー ゲット オウヴァー

★ He that stays in the valley shall never get over

ザ ヒル

the hill.

(谷間にとどまる者は決して山を越えることがない)

⇒ 井の中の蛙<かわず>大海を知らず

ヒー フー ウッド クライム ザ ラダー マスト ビギン アット ザ

★ He who would climb the ladder must begin at the

ボトム

bottom.

(はしごを上ろうとする者は一番下から始めなければならない)

⇒ 千里の行も足元より始まる

ホーマー サムタイムズ ノッズ

★ Homer sometimes nods.

(ホーマー<ホメロス>でも居眠りすることがある)

⇒ 弘法にも筆の誤り

アイセイ リトル バットアイシンク ザ モア

★ I say little but I think the more.

(口に出さないがそれだけに考えるところは多い) ⇒ 腹に一物

フレッシュ フィッシュ アンド ニュウカム ゲスト スメル イン
★ Fresh fish and new-come guests smell in
スリー デイズ
three days.

(新鮮な魚も新来の客も三日たてばにおう)

⇒珍客も長座にすぎれば厭<いと>われる

フロム ワード トゥ ディード イズ ア グレイト スペース
★ From word to deed is a great space.
(言葉と行為は遠く離れている) ⇒言うは易く行うは難し

G

グラットンニ キルズ モア ザン ザ ソード
★ Gluttony kills more than the sword.
(暴食は剣よりも多くの人を殺す) ⇒大食短命

ゴッド ノウズ ウェル フィッチ アー ザ ベスト ビルグリムズ
★ God knows well which are the best pilgrims.
(誰がいちばん善良な巡礼か、神様にはよくわかっている)
⇒天道様はお見通し

グッド カンパニィ メイクス ザ ウエイ ショーター
★ Good company makes the way seem shorter.
(よい道連れは道程を短く感じさせる) ⇒旅は道連れ

グッド ワイン インジェンダーズ グッド ブラッド
★ Good wine engenders good blood.
(よい酒はよい血液を生む) ⇒酒は百薬の長

グラスプ オール ルーズ オール
★ Grasp all, lose all.
(全部をつかめば全部をなくす) ⇒欲こぎゃ損する

グレイト ペインズ クイックリィ ファインドイーズ
★ Great pains quickly find ease.
(苦が大きければ楽が早く見つかる) ⇒苦は楽の種

H

ハーフ ア ワード イズ イナッフ フォアア ワイズ マン
★ Half a word is enough for a wise man.
(賢明な人には半語で十分である) ⇒一を聞いて十を知る

エンブティ ヴェッスルズ メイク ザ グレイテスト サウンド
★ Empty vessels make the greatest sound.
(空の樽がいちばん大きな音を出す) ⇒空樽は音が高い

エヴリィ クック コメンズ ヒズ オウン ソース
★ Every cook commends his own sauce.
(コックはだれでも自分のソースを推奨する)
⇒手前味噌を並べる

エヴリィ カントリィ ハズ イッツ ロウ
★ Every country has its law.
(どんな国にもそれぞれの法がある) ⇒郷に入りては郷に従う

エヴリィ マン ハズ ヒズ フォールツ
★ Every man has his faults.
(人には誰でも欠点がある) ⇒無くて七癖

エヴリィ ミラー ドロウズ ウォーター トゥ ヒズ オウン ミル
★ Every miller draws water to his own mill.
(粉屋はみんな自分の水車に水を引く) ⇒我田引水

エヴリィボディズ ビズィネス イズ ノウボディズ ビズィネス
★ Everybody's business is nobody's business.
(みんなの仕事というのはだれの仕事でもない)
⇒共同責任は無責任

F

ファンシー メイ キル オア キュア
★ Fancy may kill or cure.
(幻想から人は死んだり治ったりすることがある) ⇒病は気から

ファースト カム ファースト サーヴド
★ First come, first served.
(最初に来た者が最初にもてなされる)
⇒先んずれば即ち人を制す

フォア ア ティントスィング ケア ノット
★ For a tint thing care not.
(なくした物は気にするな) ⇒あきらめは心の養生

フォーチュン フェイヴァーズ ザ ブレイヴ
★ Fortune favors the brave.
(幸運の女神は勇者に味方する)
⇒身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ

チェインジング オヴ ワーズ イズ ライトニング オヴ ザ ハート
★ Changing of words is lightening of the heart.
(言葉をかわせば心が軽くなる) ⇒言わねば腹ふくる

クロー ミー アンドアイウィル クロー ユー
★ Claw me, and I will claw you.
(我を搔<か>け、されば汝を搔かん) ⇒魚心あれば水心

クラフト ブリングズ ナッシング ホーム
★ Craft brings nothing home.
(狡猾は何物も家にもたらさない) ⇒策士策に溺れる

カスタム メイクス オール スイングス イーズィ
★ Custom makes all things easy.
(習慣により万事が容易になる) ⇒習うより慣れよ

D

デス イズ ザ グレイト レヴェラー
★ Death is the great leveler.
(死は偉大な平等主義者である) ⇒冥土<めいど>の道には王もなし

ディザイア ハズ ノウ レスト
★ Desire has no rest.
(欲に休息なし) ⇒欲に頂なし

ディスペイア キヴズ カレッジ トゥ ア カウアード
★ Despair gives courage to a coward.
(絶望は臆病者に勇気を与える) ⇒窮鼠<きゅうそ>猫を噛む

ドウント キル ザ グース ザット レイズ ザ ゴールデン エッグズ
★ Don't kill the goose that lays the golden eggs.
(金の卵を生むガチョウを殺すなかれ) ⇒元も子もない

ドゥ ザ ライクリエスト アンド ゴッド ウィル ドゥ ザ ベスト
★ Do the likeliest, and God will do the best.
(最適のことを為せ、そうすれば神は最善を施すであろう)
⇒人事を尽くして天命を待つ

E

イーズィ カム イーズィ ゴウ
★ Easy come, easy go.
(簡単に入って簡単に出て行く) ⇒悪銭身につかず

アピアランス オープン ディシィーズ

★ Appearance often deceives.

(外観はしばしば人を誤らせる) ⇒人は見かけによらぬもの

アートイズ ロング ライフイズ ショート

★ Art is long, life is short.

(芸術は長く、人生は短い) ⇒少年老い易く学成り難し

B

ビューティ イズ バット スキンディーブ

★ Beauty is but skin-deep.

(美貌はほんの皮一重にすぎない) ⇒美しいも皮一重

ビリーヴ ノットオールザット ユー シー ノア ハーフ ホワット ユー

★ Believe not all that you see nor half what you

hear.

hear.

(見たことの全部を信じてはならない、聞いたことは半分も信じてはならない) ⇒話半分

ベスト トゥ ベンド ホワイル イットイズアトゥウィッグ

★ Best to bend while it is a twig.

(小枝のうちに曲げるのがいちばんよい)

⇒矯<た>めるなら若木のうち

ベター アン オープン エネミー ザン ア フォルス フレンド

★ Better an open enemy than a false friend.

(偽りの友よりもあからさまな敵のほうがよい)

⇒獅子<しし>身中の虫

ベター ビイ ザ ヘッド オヴ ア ドッグ ザン ザ テイル オヴ ア ライオン

★ Better be the head of a dog than the tail of a lion.

(ライオンの尾となるより、犬の頭となるほうがよい)

⇒鶏口となるも牛後となるなかれ

C

ケア キルド ア キャット

★ Care killed a cat.

(心労が猫を殺した) ⇒心配は身の毒

キャスト ノット パールズ ビフォア スワイン

★ Cast not pearls before swine.

(豚の前に真珠を投げるな) ⇒豚に真珠

英語の

とわざ

★ Affection blinds
(愛は理性に目隠しをする) ⇒ 愚

★ Age and experience teach wisdom.
(年齢と経験が英知を授ける) ⇒ 亀の甲より年の劫<こう>

★ All that glitters is not gold.
(輝くものがすべて金とは限らない) ⇒ 見かけばかりの空大名

★ All work and no play makes Jack a dull boy.
(勉強ばかりして全く遊ばないと子供は馬鹿になる)
⇒ よく学びよく遊べ

★ Anger punishes itself.
(怒りは自らを罰する) ⇒ 短気は損気

ミニ辞典シリーズに関するお問い合わせは下記
までご連絡をお願いいたします。

●ダイソーミニ辞典 お客様センター●

TEL.03(5961)5772

受付時間 月曜日～金曜日(祝祭日を除く)9:00～12:00、13:00～17:00

ダイソー ミニ辞典シリーズ⑬

ミニことわざ事典

株式会社 大創出版
株式会社 大創産業

広島県東広島市西条町吉行向1-60

複写・複製・転載を禁じます。乱丁・落丁本はお取り替えます。

チェインジング オヴ ワーズ イズ ライトニング オヴ ザ ハート
★ Changing of words is lightening of the heart.
(言葉をかわせば心が軽くなる) ⇒言わねば腹ふくる

クロー ミー アンドアイウィル クロー ユー
★ Claw me, and I will claw you.
(我を搔<か>け、されば汝を搔かん) ⇒魚心あれば水心

クラフト ブリングズ ナッシング ホーム
★ Craft brings nothing home.
(狡猾は何物も家にもたらさない) ⇒策士策に溺れる

カスタム メイクス オール スイングス イーズィ
★ Custom makes all things easy.
(習慣により万事が容易になる) ⇒習うより慣れよ

D

デス イズ ザ グレイト レヴェラー
★ Death is the great leveler.
(死は偉大な平等主義者である) ⇒冥土<めいど>の道には王もなし

デザイア ハズ ノウ レスト
★ Desire has no rest.
(欲に休息なし) ⇒欲に頂なし

ディスペア キヴズ カレッジ トゥ ア カウアード
★ Despair gives courage to a coward.
(絶望は臆病者に勇気を与える) ⇒窮鼠<きゅうそ>猫を噛む

ドウント キル ザ グース ザット レイズ ザ ゴールデン エッグズ
★ Don't kill the goose that lays the golden eggs.
(金の卵を生むガチョウを殺すなかれ) ⇒元も子もない

ドゥ ザ ライクリエスト アンド ゴッド ウィル ドゥ ザ ベスト
★ Do the likeliest, and God will do the best.
(最適のことを為せ、そうすれば神は最善を施すであろう)
⇒人事を尽くして天命を待つ

E

イーズィ カム イーズィ ゴウ
★ Easy come, easy go.
(簡単に入って簡単に出て行く) ⇒悪銭身につかず

アピアランス オープン ディシィーヴズ

★ Appearance often deceives.

(外観はしばしば人を誤らせる) ⇒人は見かけによらぬもの

アートイズ ロング ライフイズ ショート

★ Art is long, life is short.

(芸術は長く、人生は短い) ⇒少年老い易く学成り難し

B

ビューティ イズ バット スキンディーブ

★ Beauty is but skin-deep.

(美貌はほんの皮一重にすぎない) ⇒美しいも皮一重

ビリーヴ ノットオールザット ユー スィー ノア ハーフ ホワット ユー

★ Believe not all that you see nor half what you

hear.

(見たことの全部を信じてはならない、聞いたことは半分も信じてはならない) ⇒話半分

ベスト トゥ ベンド ホワイル イットイズアトゥウィッグ

★ Best to bend while it is a twig.

(小枝のうちに曲げるのがいちばんよい)

⇒矯<た>めるなら若木のうち

ベター アン オープン エネミー ザン ア フォルス フレンド

★ Better an open enemy than a false friend.

(偽りの友よりもあからさまな敵のほうがよい)

⇒獅子<しし>身中の虫

ベター ビイ ザ ヘッド オヴ ア ドッグ ザン ザ テイルオヴ アライオン

★ Better be the head of a dog than the tail of a lion.

(ライオンの尾となるより、犬の頭となるほうがよい)

⇒鶏口となるも牛後となるなかれ

C

ケア キルド ア キャット

★ Care killed a cat.

(心労が猫を殺した) ⇒心配は身の毒

キャスト ノット パールズ ビフォア スワイン

★ Cast not pearls before swine.

(豚の前に真珠を投げるな) ⇒豚に真珠

英	語	の		
	こ	と	わ	ざ

配列はa,an,theなどの冠詞を含め初頭のアルファベット順です。

A

- ア バッド ワークマン オールウェイズ プレイムズ ヒズ ツールズ
- ★ A bad workman always blames his tools.
 (下手な職人は道具に難癖をつけるもの) ⇒下手の道具立て
- ア バーゲイン イズ ア バーゲイン
- ★ A bargain is a bargain.
 (約束は約束) ⇒武士に二言はない
- アフェクション ブラインズ リーズン
- ★ Affection blinds reason.
 (愛は理性に目隠しをする) ⇒恋は思案の外
- エイジ アンド エクスピリエンス ティーチ ウィズダム
- ★ Age and experience teach wisdom.
 (年齢と経験が英知を授ける) ⇒亀の甲より年の劫<こう>
- オール ザット グリッターズ イズ ノットゴールド
- ★ All that glitters is not gold.
 (輝くものがすべて金とは限らない) ⇒見かけばかりの空大名
- オール ワーク アンド ノウ プレイ メイクス ジャック ア ダル ボーイ
- ★ All work and no play makes Jack a dull boy.
 (勉強ばかりして全く遊ばないと子供は馬鹿になる)
 ⇒よく学びよく遊べ
- アンガー バニッシュズ イットセルフ
- ★ Anger punishes itself.
 (怒りは自らを罰する) ⇒短気は損気

監修：中川 昇（教育評論家）

1946年静岡県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業。教育評論家。

現在、日本書籍国語(中学・高校)教科書編集委員。元成蹊中学校・高等学校教諭。主な著書に『中学生の考える国語』『高校生の考える国語』（ともに晶文社出版）などがある。

ミニ辞典シリーズに関するお問い合わせは下記までご連絡をお願いいたします。

●ダイソーミニ辞典 お客様センター●

TEL.03 (5961) 5772

受付時間 月曜日～金曜日(祝祭日を除く)9:00～12:00、13:00～17:00

ダイソー ミニ辞典シリーズ[®]

ミニことわざ事典

編集 株式会社 大創出版

発行 株式会社 大創産業

広島県東広島市西条町吉行向1-60